

「水田漁撈」の提唱

新たな漁撈類型の設定に向けて

A Proposition on the Paddy Field Fishery

安室 知

はじめに

①漁撈類型論のあり方とその問題点

②「農漁民」と「農民漁業」

③水田用水系の意義

④水田漁撈の方法

⑤水田漁撈の対象魚

⑥水田漁撈の意義

⑦水田漁撈の歴史と広がり

おわりに

[論文要旨]

本稿の目的は、日本における水田漁撈の実態を明らかにし、その民俗的・歴史的意義を論じることにある。そして、その上で、新たな漁撈類型として水田漁撈を提唱する。

水田漁撈の場合、その主たる舞台となるのが水田用水系である。従来、内水面漁撈は、湖沼と河川に分類されてきたが、第3の水界として水田用水系は重要な意味を持っている。水田用水系とは、水田・溜池・用水路といった稲作のために作られた人工的水界を指し、その特徴は、稲作活動により1年をサイクルとして水流・水量・水温などの水環境が多様に変化することにある。

水田漁撈とは、水田用水系を舞台にして、稲作の諸活動によって引き起こされる水流・水温・水量などの水環境の変化を巧みに利用し、ウケや魚伏籠といった漁具を用いて行う漁である。漁の対象は、水田に高度に適応した生活様式を持つドジョウ・フナ・コイなどの水田魚類である。水田漁撈は、漁獲原理の上で、受動的で小規模な漁撈技術を多用する水田用水期（4～9月）と能動的で比較的大規模な漁撈が行われる水田乾燥期（10～3月）の2期に分けられる。

水田漁撈の民俗的・歴史的意義として、以下の5点を指摘することができる。①自給的生計活動（動物性タンパク質獲得技術）としての重要性、②金銭収入源としての重要性、③水田漁撈が生み出す稲作社会の統合、④水田漁撈の娯楽性、⑤稲作史に与えた影響。

従来、水田漁撈は漁撈技術による類型では「雑漁」とされ、農民が行う取るに足らない生業として扱われてきたが、その裾野は漁業者による漁撈よりもはるかに広いものがある。さらにいうと、水田漁撈は日本にとどまらず東・南アジアの水田稲作圏全域にかかわる問題である。また歴史的にみても、稲作文化と漁撈との関係は根源的なものがうかがわれる。

はじめに

本稿の目的は、日本における水田漁撈の実態を明らかにし、その民俗的・歴史的意義を論じることにある。そして、その上で、新たな漁撈類型として水田漁撈を提唱したいと考えている。それは、日本の民俗文化全体の中における漁撈の位置づけを考え直す作業でもある。

水田漁撈の存在に目を向けると、まずもって目に付くのは、昭和30年代に進行した水田環境の大きな変貌である。この時期を画期として、農薬の散布と化学肥料の大量使用が全国的に進行する。それにより一時期水田内からドジョウやタニシなどの生き物がほとんど姿を消してしまった。

したがって、ここに復元しようとする時期は、そうした水田環境が大きく変貌する以前のもので、かつ民俗学的な聞き取り調査で遡及可能な時期となる大正から昭和初期にかけてのものである。当然ここに設定しようとしている漁撈類型もその時期に適用されるものである。

生業行為としての水田漁撈は、後に詳述するように、近代以前に遡って考えることも可能であるが、本論ではひとまず民俗学的方法にこだわり、近世以前の遠い過去へ遡ることは控えたい。従来、民俗学において民俗文化の類型化がなされる時、時間概念の欠如が大きな問題として指摘されてきた。論じられている類型がいつの時点のものなのかを明確にしないまま、またときに意図的にそれが原始古代にまで遡りうるものとされてきた。時間軸を明確にして設定した類型が、論理的考察を経ることで、過去に遡ったり、また未来に続くものとして解釈されることはありえようが、民俗学における類型論の多くはそれ以前の問題であるといえる。

①……………漁撈類型論のあり方とその問題点

従来の漁撈類型は、以下に示したように、漁撈技術か漁場水域またはその両者の組み合わせによって設定されるのが一般的であるといつてよい。⁽¹⁾民俗学でも基本的にそれを踏襲してきた。とくに民俗学における技術に偏向した生業研究では、漁撈技術の分類をもって、その類型化がなされることが多かったことはいうまでもない[安室 1992a]。

○漁撈技術による類型⁽²⁾

釣漁……竿釣・手釣・一本釣・延縄釣など

網漁……原始的網・立切網・底網・浮網・建敷網・沖網

雑漁……ウケ・エリ・ヤナ・鵜飼いなど

○漁場水域による類型⁽³⁾

海面漁業……地先(沿岸、浅海)漁業・沖合漁業・遠洋漁業

内水面漁業……河川漁業・湖沼漁業

こうした類型設定のあり方については、大きく分けると2つの問題がある。

第1点目の問題は、こうした漁撈類型は漁業者を対象になされたものであるということである。農耕を主生業とする人々の行う漁撈活動はほとんど無視されてきたといつてよい。そうした研究姿勢は、農耕を主生業とする人々が行う漁撈、つまり生計活動としての意味をそれほど持たず自家消

費の範囲内で行われる漁撈や楽しみのために維持されてきた漁撈といったものは、はじめから研究の対象外に置かれていたといわざるをえない。漁撈という行為が、商品経済・貨幣経済の流れに乗って金銭収入の方途として専門化に向かう一方で、はるかに多くの人々は自給的な範囲で漁撈を行っていた。むしろそうした漁撈活動の方が裾野ははるかに広いものがあったと考えられる。漁撈は、多くの場合、金銭収入として特化した地域やそうした時期以外においては、むしろ他の生業とくに農耕と複合的に営まれることに大きな生計上の意義があったと考えられる。

本来、漁撈行為は漁業者にのみ認められるものではなく、他の生業を主とする人々の間でもかなり普遍的に行われてきた。日本の場合、漁業ではなく漁撈の視点に立つことで、金銭収入源としての位置づけをひとまず度外視して考えれば、むしろ農民が主体となっていく漁撈がかなりの部分を占めてきたといつてよい。そうしたとき、より実態に即した形で、農耕を主生業とする人々が行う漁撈行為をも包含する類型を定立することが民俗学には求められるのではなかろうか。

そして、もうひとつの問題は、内水面および内水面漁撈の位置づけに関することである。

海面漁撈に比べると、内水面漁撈は「原始漁法」という呼び方が存在するように、素朴で経済性の低いものとして位置づけられてきた。

さらにいえば、内水面漁撈に特徴的なウケやエリ・ヤナといった漁撈方法は、網漁や釣漁と区別され、いわゆる「雑漁」[日本学士院 1959]や「特殊漁業」[農商務省水産局 1912]とされてきた。つまり、内水面漁撈は、明らかに海面漁撈に比べると、経済的にも技術的にも、劣ったものという前提が存在していたといつてよい。しかし、後に述べるが、マイナー・サブシステムの視点に立てば、そうした漁撈が持つ文化的な意義が十分に把握されるはずである。海附きの村よりもはるかに多数の内陸の村の存在を今一度、漁撈を通してしてみる必要がある。

また、内水面漁撈は、多くの場合その対象水域は、河川と湖沼とに分けられてきた。しかし、日本においては、大きな湖沼や大河川に面した村においてでさえも、それが漁村化することは稀なことである。そうした村の多くは、村の中に数戸の川漁師⁽⁶⁾が存在するだけである。むしろそうした人たちが行う漁よりも、一般に農民と呼ばれる（また自称する）人たちが行う漁の方がはるかに多数を占めている。

そうしたとき、内水面においては、河川・湖沼に対して第3の漁撈空間として水田を取り巻く人工的水界が注目されるのである。そうした農民たちにとって重要な漁撈空間が後に述べる水田用水系であり、そこにおける漁撈を包括して水田漁撈と呼ぶことにする。

②……………「農漁民」と「農民漁業」

日本における漁撈類型のひとつとして水田漁撈を提唱しようとするとき、その前提として、「農漁民」および「農民漁業」の概念に注目する必要がある。

従来、民俗学においては、稲作・畑作・漁撈・狩猟といった生業要素が各々独立しているかのよう個別に論じられることが多かった。そうした状況のなか、1970年代から80年代にかけてやっと、河岡武春・辻井善弥・高桑守史らによって、生活が維持される方法という至極当たり前の視点に立った生業（とくに漁撈）研究のあり方が示された。その象徴が、漁農民であり農民漁業である。

まず、河岡と辻井は、水界に接して暮らす日本人の基本的生計維持のあり方として、農漁民（漁農民）の概念を提示した。二人は期せずしてこうした同様の概念を提出したが、その道のりは同じではない。河岡の場合は、自身が提唱した低湿地文化に関して主として物質文化の視点から考察を進めるうちに、日本海沿岸などにみられる潟湖周辺の低湿地に暮らす人々が、湿田稲作を主とした農耕とともに低湿地での漁撈や狩猟を重要な生計活動のひとつとして行っていたことからの発想であった〔河岡 1976〕。それに対して、辻井は、三浦半島などの磯附きの村を調査対象として、磯に迫るオカ（丘）での畑作およびヤト（谷戸）と呼ぶ丘に切れ込んだ浅い谷の底で行う稲作と、磯場におけるオカドリなどの採集やミヅキ（見突き）・モグリ（潜り）といった磯漁とがセットとして行われることにより、そうした地域に暮らす人々の生計が維持されてきたことを実証的に明らかにした〔辻井 1977〕。

続いて、高桑は、日本の伝統的漁業の分類を試みるなか、海民漁業（釣漁・あま漁・突き漁）に対して、農民漁業（網漁）の概念を提出している〔高桑 1983・1984〕。それは、水界への志向性や世界観といった要素を、類型化の設定要素に取り込むことにより、従来の単なる漁撈技術や村落形態による分類ではなく、漁業をその主体者により類型化しようとする民俗学独自の試案を提出している。河岡や辻井の論が未だ明確に理論化されないなか、大きな進展といってよいであろう。

しかし、高桑の農民漁業の概念は、地先海域を占有する半農半漁の沿岸漁村とくに定置網漁を行う漁村を主たる分析対象として考案されたものである〔高桑 1983〕。それは、農民とはいうものの、海附きの村に暮らす人々を母体にして、あくまでその中において海民（海洋民）の対立概念として提出されたものである。そのため、高桑のいう農民漁業には、海（または内水面でいえば琵琶湖のような大水面）とは無縁のいわゆる内陸農村に暮らす人々が行う漁撈は含まれていない。

そうした点からすれば、農民漁業の主体者たる農民は、河岡や辻井の提示した農漁民（漁農民）とは概念を大きく異にしている。研究対象となる人々も、河岡や辻井がいわゆる漁業者に限定されることなく広く水界（しかも海などの大水面に限定されない）に接して暮らす人々全般であったのに対して、高桑の場合は最初から漁業者とくに海に暮らす人々を念頭に置いていたといえる。

つまり、高桑のそれは海を対象とした「漁業」を念頭に置いての分類であったのに対して、河岡や辻井のそれは海は当然のこと内水面（低湿地や小河川・湖沼、さらに水田・溜池といった人工的水界も含む）を見据えた「漁撈」行為による分類であるといえる。本稿は、高桑の研究を民俗学上のひとつの成果と認めつつ、日本人の生業における漁撈の意義を考えると、筆者の研究視点にとってより大きな可能性を秘めていると考えられる河岡や辻井が展開しようとした漁撈行為による分類を目指すものである。⁽⁷⁾

研究史をたどると、こうした河岡や辻井の展開しようとした概念は、おそらく渋沢敬三の影響と無関係ではなからう。渋沢はアチック・ミュージアムにおいて^{うけ}筌研究会を組織し、いわゆる農民の行う漁撈活動にいち早く注目している。渋沢敬三はいう、「一方には小さい漁業としては百姓が筌やブツタイのようなもので泥鰌などを獲って居る漁業もある。これはいかにも小さくまとまって居らぬので下らない漁業のようでありますけれども日本全体からみると馬鹿に出来ない。この筌というものが日本全体に何百何千万個あるかわからない。従ってこの筌によって採取されて居る所の量というものも統計には出来ないが非常に莫大なものかも知れない」〔渋沢 1954〕

こうした渋沢の言葉の背景には、従来、内水面漁撈と海面漁撈とを截然と分けて考えることへの異議と海・河川・湖沼等の水界と陸地との接点に存在する低湿地への注目があつた〔河岡 1975〕。まさに、筆者の研究視点と重なるものである。後に詳しく述べるが、ウケがことのほか水田漁撈にとって大きな意味を持つことを考えると、渋沢のこうした研究視点がやはりウケの研究から発せられたことの意義は大きい。

しかし、民俗学ではこのように先駆的な研究がなされてきたにもかかわらず、その後こうした研究視点が十分に受け継がれることなく、結果的に生業研究は技術論・系統論中心のものとして停滞することになった。

また、一方、広く海外の研究動向に目を向けてみると、こうした発想はなにも日本だけのものではなく世界的なものであつたことがわかる。たとえば、渋沢らの研究と時をほぼ同じくしてなされた地理学者カール・サウアーの農耕起源論にもそうした発想を見て取ることができる。サウアーは、農耕の起源を語る上で、*fishing-farming culture*（漁撈農耕文化）の考え方を示し、原初的な農耕文化は淡水漁撈と結び付いていたと想定した〔サウアー 1952〕。農耕起源論としての適否はここでは論じるつもりはないが、サウアーが想定した淡水漁撈と農耕とが結び付いた *fishing-farming culture* のあり方は、農耕を主とした基本的生計維持のあり方を示すもので、水田稲作文化はその典型になると考えられる。こうした考え方は、後に川喜田二郎が日本人の原初的生業パターンとして提示した「水界民」〔川喜田 1980〕とも一脈通じるものがある。

こうした日本内外の先駆的研究以降も、水田稲作と淡水漁撈との関係性についての指摘は、東・南アジアの稲作圏を調査する文化人類学や地理学などのフィールドワーカーによりなされた。その背景には、フィールドワークの途上、東・南アジアの稲作圏では比較的容易に実体験として水田を舞台とした漁撈風景に出会うことが可能であつたことが上げられる。フィールドワーカーの実感としてその重要性が感得されていたわけである。そうした業績のひとつとして、八幡一郎の魚伏籠に関する研究が注目される。八幡一郎は、東南アジア旅行の体験に触発され、魚伏籠に関して広く日本・フィリピン・インドネシア・古代中国といった国々の民族事例や考古資料を集め、稲作と淡水漁撈との関係に強い関心を示した〔八幡 1959〕。

その後も、水田漁撈に関しては、東・南アジアの稲作圏における文化人類学的報告書の中に断片的な事例として散見され、その重要性はシンポジウムの席上など比較的自由な雰囲気の中では何度か指摘されてきた。

たとえば、大嶋襄二は、漁撈文化を論じる中で、農耕文化との関係を指摘し、その第1の要点として水田稲作と淡水漁撈との関係に着目している。「東南アジアから日本にかけてのこういう組み合わせの中での漁撈の担当者が、専門的な漁民ではなくてむしろ農民だったのではないか」として注意を喚起している〔大嶋 1977〕。また、同様に、日本の干潟漁撈を研究してきた湯浅照弘は、柳田国男の『海上の道』論に引き寄せて、「内水面漁撈といい、干潟漁撈といい、稲作文化と結びついたパターンが存在したのではなかったか」とやはり重要な指摘をしている〔湯浅 1978〕。この他、石毛直道・藪内芳彦・野口武徳もそうした議論の中で、その重要性を認め、各自の世界各地におけるフィールド体験について語っている〔大嶋 1977〕。

しかし、民俗学や文化人類学といったフィールドワークを基本とする諸分野において、水田漁撈

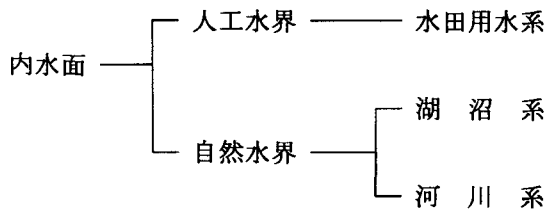


図1 漁撈からみた内水面の分類

の実態が強く認識され、問題提起が何度となくされてきたにもかかわらず、その後、水田稲作と漁撈との関係については明確な調査対象とされることはなかった。その結果、後述する食習俗の研究など特定の分野以外には、実証的な研究および理論的な研究の成果はほとんど上がっていない。

③……………水田用水系の意義——水田漁撈の場(漁場)と機会(漁期)について——

I 水田用水系とは

(1) 水田用水系の定義

水田漁撈を論じるとき、その主たる舞台として水田用水系は重要な意味を持ってくる。

漁撈の場としてみた場合、従来、内水面は河川と湖沼とに分けられることが多かった。つまり、そこには、内水面漁撈とは湖沼または河川で行われるものであるという前提があったといえる。しかし、湖沼と河川の分類はたんに自然の水界を分けたものにすぎない。当然、先に述べたように、そうした従来の分類視点では、水田など人工の水界で行われる内水面漁撈は存在しないことになる。

ここで提案するのは、図1に示したように、漁撈の場としてみた場合、内水面を人工水界と自然水界に二分する考え方である。人工水界は後に定義する水田用水系に対応し、自然水界は湖沼と河川に分けて理解される。

日本の場合、歴史的にみると、水田稲作の拡大展開の過程で、自然の水界を人為を加えて改変したり、またまったく新たに人工の水界を造り出してきた。そして、結果としてそうした人工の水界は人のまわりでは自然の水界よりも多く存在するようになった。すくなくとも、人にとって身近な環境になればなるほど、自然の水界よりも人工の水界の方が圧倒的に多く存在しているといつてよい。当然といえば当然のことではあるが、そうした人工の水界は人里離れたところではなく、人を取り巻く身近な環境の中に集中的に形成されるからである。

そうした人工的水界の代表的なものに水田用水系がある。水田漁撈の場は、まさにその水田用水系である。水田用水系とは、水田・溜池・用水路といった稲作のために作られ、かつ管理維持されている人工的水界を指す。そうした水田用水系の特徴は、湖沼や河川といった自然の水界とは違って、稲作活動により、水流・水量・水温などの水環境が多様に変化することにある。しかも、そうした水環境の変化は稲作とともに1年をサイクルとして毎年繰り返される。

(2) 水田用水系の多様性

水田用水系は、日本の場合、地域的な偏差が大きい。その地域の地形や気象など自然条件を反映して、水田用水系の構成要素は大きく異なっている。たとえば、讃岐平野のような瀬戸内海気候の寡雨地帯では水田用水系の中に占める溜池の割合(重要性)は大きくなるし、河川が造る扇状地に

展開する水田地帯では溜池はあまりみられず代わりに用水路網が発達している。この他にもさまざまなバリエーションがみられる。また、水利の制御度に焦点を当てると、たとえば湖岸の低湿田のように自然の水界と接して人為による管理度が低い、つまり自然と拮抗するところに存在するものから、用水灌漑が整えられ水田には1枚ごとに必ず取水口と排水口が設けられる（取水路と排水路が完全に分けられる）ような人為による管理が行き届いた水田まで、さまざまな水利上の発展段階にある。

水田は、水利の整った乾田の場合でいえば、季節的に乾燥期（10月から3月）と用水期（4月から9月）に二分される。そのうち用水期は、さらに取水期（ノボリ）と排水期（クダリ）に分けられるとともに、水口と尻水口を止めて水を水田中に貯める滞水期や反対に水口と尻水口の両方を開けて水を絶えず水田の中に通わせる掛け流しといった時期も存在する。水田用水系の中でも、そうした非常に細やかな水管理が行われることに水田の特徴がある。当然、この場合は水田の中でももっとも水制御の整った乾田（水口とともに尻水口を有する）を例にしているが、水利の発展段階としては常設の水口や尻水口を持たない天水田のようなものや、また反対に排水口しか持たない低湿田などさまざまな段階が存在している。

溜池に関しても、水利上、やはり溜池の中に水のある時期（水を溜める時期）とない時期（水を稲作のために使いきるか、または管理維持のためにいったん水を排除してしまう時期）に二分される。溜池の場合、水田のようにノボリ・クダリの区別はなく、水田漁撈の機会として意味を持つのは溜池から水が排除されたときが主である。また、溜池は、稲作地には必ず存在するという性格のものではない。讃岐平野のように数多く存在するところとほとんど存在しないところとの対照は大きく、結果として分布上の濃淡がかなりはっきりしている。また、ひと口に溜池といっても、山間地に見られる谷池のように一方に堰を築いて作るダム状のものと、いわゆる皿池のように平坦地にドーナツ状に土累を築いてその中に水を溜めたものがある。

用水路の場合は、河川や溜池などの用水源と水田とを結びつけるところにある。水田の場合と同様に、季節的に乾燥期と排水期に大別され、さらに用水期はノボリとクダリに分けられる。ただし、人為的に用水路の内部に滞水することはなく、ノボリにしるクダリにしる絶えず水流を伴っている点が水田とは異なっている。また、溜池の場合と同様に、用水路において水田漁撈が行われる機会は、排水時に限られる場合が多い。

また、水田とひと括りにいっても、それは漁撈の場としてみるとさまざまな特徴を持っている。たとえば、西表島の例[安室 1994a]にみられるように、水田にはミズグモリと呼ぶ水溜まりが存在し、そこは魚の繁殖の場であるとともに水田漁撈の場となっていた。ミズグモリは、出入りする水の勢いにより水口付近の底土がえぐれてしまったもので、西表島の場合にはその面積が8坪（約26㎡）にもおよぶものがあった。そうすると、まるで1枚の水田の中が稲を植える部分と池とに分かれているような様相を呈していた。こうした水田中の水溜まりは傾斜地の水田ほど多くみられる。また、西表島だけではなく、本土においても山間の棚田や谷戸田のような傾斜のある水田地には、規模の大小はあるものの必ずといってよいほどに存在していた。

また、それとは反対に、低湿地においても水田には水溜まりが伴っていることが多かった。三角州や遊水池などにある低湿地では、少しでも地を高くしようとして土盛りした水田が造られた。そ

うした水田をホリアゲタ（掘り揚げ田）などと呼ぶが、ホリアゲタには必ず盛土用の土を掘り取ったところが池として残った。景観上、1枚の水田にひとつの池が付属してあるような状態であった。これについては、渡良瀬遊水池に隣接してある栃木県小山市白鳥を例〔安室 1988〕にして示したとおりである。

以上示したような水田用水系の地域的な偏差は、当然、水田漁撈の方法だけでなく、住民の水田漁撈に対する志向性というものにも大きく関わってくることである。

2 水田用水系にみる漁場化の背景

（1）稲作の場から漁場への転換

漁場としての水田用水系の機能には大きく分けて2つの側面がある。水田用水系の第1の機能として注目されるのは、大水などにより稲作のための水界から一転して漁の場へと転換することにある。木崎湖畔の低湿稲作集落（長野県大町市海ノ口）の事例〔安室 1992b〕で示したように、時として水田は梅雨時などの増水期には河川や湖水の氾濫に伴い一時的に冠水し漁場化することがある。そうした時期は水田用水系に適応した魚類（後述）の産卵期にあたっていることが多く、そうした魚類は自然水界から大挙して水田用水系内へ産卵にやってくる。

稲の植えられている水田が冠水するということは、いわば稲作の論理からすれば危機的な状況である。しかし、稲は生命力が強く多少の冠水ぐらいでは壊滅してしまうことはない。多くの場合、そうした機会は低湿地に暮らす人々にとっては生命を脅かす危機としてよりは、むしろ意識の上では魚取りの好機として捉えられている。しかも、水田が大水により水没することは、低湿地に暮らす人々にとっては毎年繰り返されることであり、そうした兆候は民俗知識を活用することによってある程度予測が可能であった。毎年ほぼ決まってやってくるそうした水田の冠水といった出来事を、単に生命や稲作の危機とだけ捉えるのではなく、それをうまく回避しながら漁の好機として利用する知恵と技術を身に付けていたといえる。当然、そのことは、低湿地に暮らす人々が稲作に単一化した生計よりも、漁撈や狩猟・採集といった多様な生業を組み合わせる生計を維持しようとする指向を強く持っているため、稲作に多少の影響がでてみてもそれほど生計全体にとってはダメージが大きくないという生計維持のための基本戦略が存在することを意味している〔安室 1987a〕。

また、おうおうにして低湿地では大水と裏腹の関係にある水不足の状態に陥ることがあるが、そうしたときでさえも水田用水系は漁の場へと姿を変えることがある。水不足になると、溜池のように本来水があるべきところやたえず余水が溜まっているホリアゲタの堀のようなところは、干上がったたり水位が大きく低下したりする。そうすると、そこは掻い干し漁などの場として利用されることになる。干害にしても、洪水と同様に稲作にとっては危機的状況に違いないが、やはりそれはそうした環境に暮らす人々にとっては漁の好機となりえたといえる。

（2）稲作活動に伴う水田の漁場化

洪水などに伴い稲作の場が漁場へと転換するといった第1の機能に対して、第2のそれは、水田が稲作に利用されることにより必然的に導き出される水田漁場化の機能である。田植えや稲刈りといった稲作の諸活動がもたらす水田の漁場化現象であるといえる。

稲作に関連してなされる作業は、春先の苗代から始まって秋の稲刈りまで、かならずといってよ

いほどに水の管理を伴っている。苗代前には苗代田に引くための水が入られるし、その後は本田にも代掻きや田植えに際して同様に水が入られる。田植え後は水田では取水しながら同時に排水するいわゆる掛け流しが行われる。そして中干し（土用干し）の時期になると、水田内の水はいったんすべて排水される。その後また水が入られるが、稲刈り前になると水田を乾燥させるために水落としが行われる。こうした稲作作業に伴う水流の変化は大まかな流れだけをあげたものであり、細かく見ていくと各作業にはさらに精緻な水管理が伴っている。

こうした一連の水管理を、人々は民俗知識として大きく2つに分けて認識している。それがノボリ（上り）とクダリ（下り）である。これはその時期の水田用水系内における代表的な水流のあり方を象徴したものである。ノボリとは自然水界から水田用水系へ、つまり川や湖から用水路そして水田の中へと水が入っていくことをいい、クダリとは水田用水系から自然水界へ、つまり水田の中の水が用水路を通して川や湖へと排水されることをいっている。栃木県小山市の調査事例〔安室1988〕では、稲の花の咲く頃を境として、それ以前がノボリ、それ以降がクダリの時期とされる。ただし、もう少し細かく水管理のあり方を見ていくと、水田内の水の流れは実際にはノボリ・クダリとも一方的な方向だけではないことがわかる。ノボリとはいっても、一方的に水流が水田内に入るばかりではなく、ノボリにはかならず水田内からの排水が伴っている。また、クダリの時期も、土用干しのごとく、水をいったん落とした後また水田に水を入れるというように、実際には水は水田内を出たり入ったりする。

そうした水流の変化は、水田内の水温変化や水量変化をかならず伴う。たとえば、水口と尻水口の両方を閉ざして水田の中に水を溜めた状態にする滞水時には水温は上がり、水口から水を取り入れると同時に尻水口から排水を行う掛け流しのときには水田内の水温は下がる。また、水流に伴う変化は水温だけでなく、稲の生長に合わせて浅水や深水にしたり、またいったん排水して水田を乾燥させたりというように、水量もたえず変化していく。

このように、水田内の水流（水温・水量）の変化に注目すると、1年を周期にして水田の水環境は多様に変化していることがよくわかる。しかもそれは水田耕作のプロセスに沿っているため、たとえば必ずノボリが先にあり後にクダリになるというように、一定の規則性を持っている。また、それは水田耕作が行われるかぎり毎年繰り返されるものである。

こうした水流・水温・水量に代表される水環境の変化が、後述するように、多様な水田漁撈を生み出す源になっている。水環境の変化に対応して、水田を産卵や採餌の場とする魚類（高度に水田環境に適応した魚類）が、自然水界から水田用水系内へ、また水田用水系内では、水田から用水路へ、用水路から水田へ、というように移動する。そうした魚の動きを狙って漁具が仕掛けられることになる。

稲作地における水の制御度を指標として、第1と第2の機能を比較すると、その受容のされ方には地域差がみられる。ごく大まかにいうと、大水面に接し自然が人為を凌駕するような稲作地では、稲作による水の制御度は低く、自然水界の増水期には水田が水没してしまったりする。そのため、第1の機能に示したような、水田が一時的に漁場化する現象がよく見られるが、反対にそうした地域は用水管理が思うようになされないことから、必然的に第2の機能は低いものとなる。それに対して、水利を整え大水などの自然の力を押さえることに成功した稲作地では、第1の機能は低い

に対して、稲作に伴う細やかな用水管理が可能となるため、第2の機能が大きく発達している。

④……………水田漁撈の方法

ひと言でいえば、水田漁撈とは、水田用水系を舞台にして、稲作の諸活動によって引き起こされる水流・水温・水量などの水環境の変化を巧みに利用し、ウケや魚伏籠といった比較的単純な漁具を用いて行う漁である。従来こうした漁撈は、漁撈技術による類型では「雑漁」とされ、取るに足らないものとして扱われてきた。しかし、その裾野は、先に示した渋沢敬三の指摘にもあるように、漁業者による漁撈よりもはるかに広いものがある。

水田漁撈の方法は、漁期に対応して大きく2つに分けることができる。水田用水期と水田乾燥期の2期である⁽⁸⁾。水田用水期とは、4月から9月くらいまでをいい、水田用水系内に水が存在する期間である。それはまた稲作労働でいうところの農繁期にほぼ相当する。それに対して、水田乾燥期とは、10月から3月までの期間をいい、いわゆる農閑期に当たる。乾田地帯においてはそうした時期は水田用水系内から強制的または自動的に水が排除されているが、低湿田地帯においても自然水界が減水期に入っているため乾燥までしないまでも水田用水系内の水は水田用水期に比べるとかなりの程度少なくなっている。以下、その2期に分けて水田漁撈の方法について検討していくことにする。

1 水田用水期の水田漁撈

水田用水期の漁撈法は、水田用水系内における稲作作業に伴う水流・水温・水量の微細な変化に対応するかたちで、ウケ類を代表とする小型の定置性陷阱漁法を多用して行われることに大きな特徴がある。たとえば、さまざまな稲作作業に応じて変化する水の流れに乗って水田を出入りする魚を水口などにウケを仕掛けておいて取る。

そうした様子を、すぐれた用水灌漑の乾田稲作地を例にとり、みていくことにする。以下では、事例を、図2のように、水田耕作プロセス（水管理のあり方）に対応させて示す。

【事例1】水田用水期の水田漁撈——栃木県小山市網戸——

○田起こし前——タニシヒロイ——

春先のタウナイ（田起こし）の前に大雨が降るとタニシが田の土の中から出てくるので、それを拾い集める。

○田起こし——ドジョウホリ——

少し水気のある田ではドジョウが土の中に潜って冬を越している。そうした田をタウナイするときにはバケツを持っていき、マンノウ（鍬）で土を掘り起こしながら、そのとき出てくるドジョウをつかみ取って入れる。

○苗代——タニシヒロイ——

ナワシロ（苗代）を作るときには水を入れてから土をよく掻き均す。そのときタニシを拾い取る。タニシは蒔いた種粃を掘り出してしまうといい、とくに入念に取った。

水田耕作プロセス	水環境の変化 (水流の方向)	水田漁撈の方法 (対象魚)
4月 田起こし前	(乾燥) -----	タニシヒロイ (タニシ)
田起こし	(乾燥) -----	ドジョウホリ (ドジョウ)
5月 苗代作り	水入れ (取水) →	タニシヒロイ (タニシ)
田植え前	水入れ (取水) →	ヒブリ (フナ)
6月 田植え前	水入れ (取水) →	ドジョウウケ:ノボリ (ドジョウ)
7月 田の草取り	掛け流し (取排水) ⇄	ドジョウウケ:ノボリ (ドジョウ)
8月 土用干し	水落とし (排水) ←	ドジョウウケ:クダリ (ドジョウ) フナウケ :クダリ (フナ)
(タ立)	水落とし (排水) ←	ドジョウウケ:クダリ (ドジョウ)
9月 稲刈り前	水落とし (排水) ←	ドジョウウケ:クダリ (ドジョウ)
10月 稲刈り後	(乾燥) -----	アキクダリ :クダリ (ドジョウ)

図2 水田耕作と水田漁撈の対応—栃木県小山市網戸の事例—

○田植え前——ヒブリ——

タウエ（田植え）前，田に水を入れると，下の水場（白鳥・下生井・上生井の3集落）からフナが田に産卵にのぼってくる。それを日が暮れてからカンテラで照らしながらヤスで突いて取る。

○田植え前——ドジョウウケ——

タウエ（田植え）の前には田に水を張るが，そのときドジョウが田にのぼってくる。そこで，水口のところにドジョウウケの笠口を田の外側に向けて仕掛ける。これを「ノボりに伏せる」という。そうすると，用水路から田にのぼろうとするドジョウがウケに入る。

○田の草取り——ドジョウウケ——

タノクサ（田の草取り）のころは田の水は掛け流しになっているが，暑い日には水口のところへノボりにドジョウウケを伏せておくとドジョウが入る。

○中干し——ドジョウウケ・フナウケ——

7月下旬，土用のころになると田の水をいったん落としてナカボシ（中干し）をする。そのとき尻水口のところに，ドジョウウケやフナウケを笠口を田の内側に向けて仕掛けておく。これを「クダリに伏せる」という。そうすると水と一緒に田をくだる魚がみなウケの中に入る。

○タ立①——ドジョウウケ——

タ立があると田の中の魚は活発に動きだす。そのためドジョウウケを田の中に伏せておくと，魚

は動き回って自然にウケの中に入る。

○タ立②——ドジョウウケ——

タ立があると田の中の水が増えすぎてしまうため早く排水しなくてはならない。そのためクロ（畦畔）の適当なところを切って水を落とすが、その切り口のところへクダリにドジョウウケを伏せておくとドジョウが入る。

○稲刈り前——ドジョウウケ——

カリイレ（稲刈り）前になると網戸用水の水を完全に止めて田から水を落としてしまう。そのとき田の中にいるドジョウもすべてくだってしまうので、ドジョウウケを尻水口のところへクダリに伏せて取る。

○稲刈り後——アキクダリ——

カリイレ後に雨が降って田に水が溜まると、泥や土の中に潜っていたドジョウが田をくだる。それを尻水口のところへクダリにドジョウウケを伏せて取る。これをとくにアキクダリという。

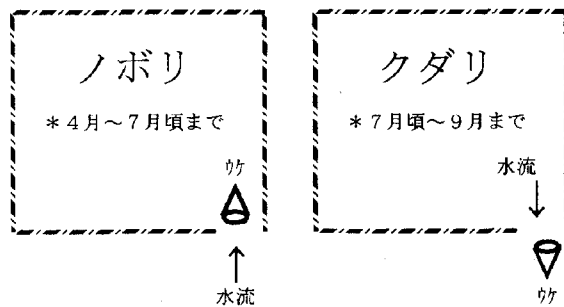


図3 水田における基本的なウケ敷設のパターン
—ノボリとクダリ—

水田用水期の水田漁撈は、漁獲原理が受動的であることに特徴がある。当然、省力の工夫が凝らされたものとなっている。漁具を水口などに仕掛けておけば、人が直接魚に働きかけることなく、魚はほぼひとりでに補魚部に溜まっていく。その間、人は水田に出て稲作作業を行うことができる。逆にいえば、人は、農繁期のためほぼ切れ目なく稲作作業をこなしていかななくてはならず、魚を追っている暇などない。具体的には、ドジョウウケのように、水口など水の動きのある場所に仕掛けることができる小型で持ち運びの簡単な漁具が多用される。

そうした漁具の仕掛け方は、前述のように、水田用水系内の水流のあり方に対応して、大きくノボリとクダリに分けられる（図3参照）。ノボリとは、水が用水路から水田内に向かって流れ込む時期のため、ウケは水田内から用水路に釜口を向けて仕掛けられる。つまり水田内に入ってくる水を受け止めるかたちで仕掛けるものである。この時期は、魚が産卵習性や生理的欲求に従って水田用水系の外から内にやってくる時期に当たっているため、ノボリに仕掛けることによりそうした魚を捕えることができる。それに対して、クダリとは、水田内の水が水田外に落とされる時期であり、ウケは水口において水田内に釜口を向けるように仕掛けられる。この時期は水田内の魚が水田用水系の外へとくだる時期に当たっており、それを捕えようとするものである。

ノボリ・クダリの区別は、先に示したように必ずしも実際の水田内の水流を示しているわけではなく、あくまでもその時期を代表する水流の認識にすぎない。そうした水流の認識のあり方が実際の稲作作業をかならずしも反映したものとはなっていないなら、ノボリ・クダリの区別は水田水利のあり方というよりもウケの仕掛け方として、より強く意識されてなされたものであると考えられる。また、実際に筆者の調査でも、水田用水期の水流のあり方がノボリ・クダリに2区分されるのはウケの仕掛け方を説明するときがほとんどであった。ノボリ・クダリの区分は稲作民にとっては水田漁撈に対応した環境認識のあり方であるといえよう。同じドジョウウケでも、稲の花が咲く時

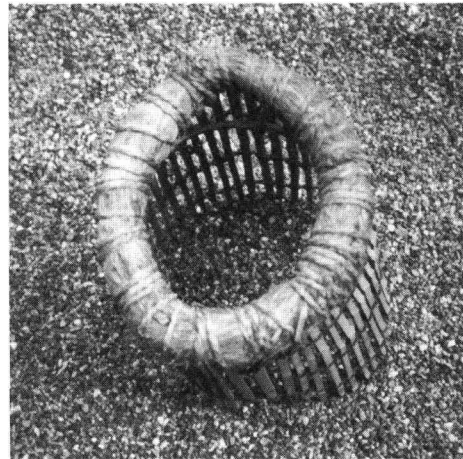
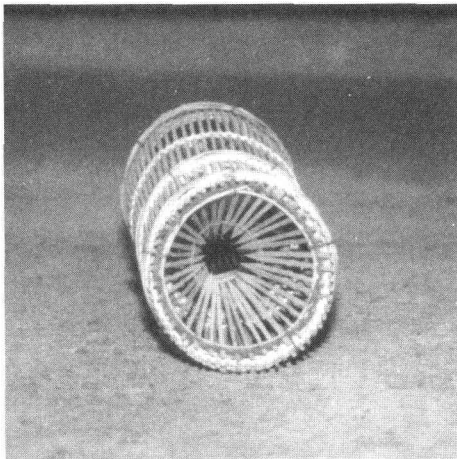
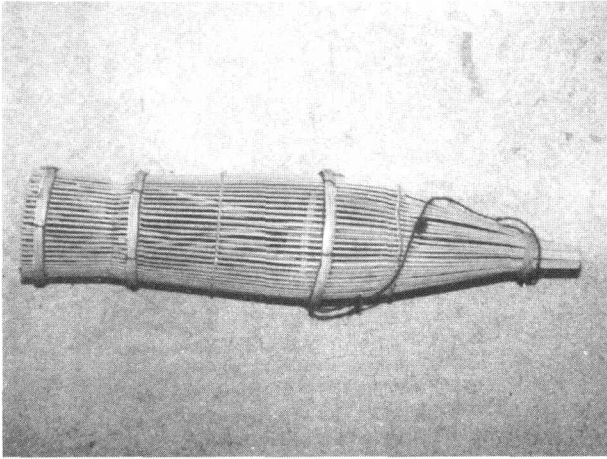


写真1 ドジョウウケ

(上・下) 千葉県夷隈郡大原町採集
全長 45.5cm, 口径 9.0cm, 重量 55g

写真2 オウギ(魚伏籠)

(上・下) 滋賀県近江八幡市資料館蔵
全長 45.0cm, 上口径 22.0cm, 下口径 37.0cm, 重量 980g

期より前の仕掛け方をノボリウケといい、それより以降の仕掛け方をクダリウケと呼んで区別するのはそうしたことの証であろう。

そうしたウケなど小型定置性の陥穽漁具以外にも、田植え前の代掻き時などにはタタキやオーニケリなどとよばれる能動的で労力投入型の漁法が行われた。これは主に松明などで灯りをとりながら夜間に行われる漁である。そのため、ヒブリ(火振り)とかヨトボシ(夜灯し)などとも呼ばれる。タタキは水田内のドジョウを櫛状に針が付いた漁具を用いて突き取るものであり、オーニケリは水田内のウナギをのこぎりや山刀を用いてやはり叩き取るものである。こうした能動的な漁法が農繁期においても可能になったのは、それが夜間に行われる漁のため、繁忙を極める稲作作業と競合することがなかったことが大きな理由として上げられる。

また、農繁期においても、低湿田地帯つまり水田用水期と乾燥期の区分が明確でない水田地帯で

は、洪水に伴う冠水時に水田内におけるつかみ取りや魚伏籠を用いての漁撈が行われた。これは前述のように、水利段階が低く完全に乾田化することができない地域における住民による生計上の工夫のひとつであり、稲作というひとつの生業に特化していないからこそ可能になっている漁法である。洪水のような自然の圧倒的な力を漁の好機と考える低湿地に暮らす人々の発想の柔軟さを示すものであるともいえよう。

以上みてきたように、こうした水田用水期に行われる漁撈の技術的特徴は、以下の5点に集約される。①受動的で省力型の小型定置性陥穽漁法が主となること（労力投入型の漁法も用いられることはあるが、その場合には夜間など稲作との労働重複を回避するかたちで行われること）、②漁は稲作作業に伴う微細な水環境の変化に対応して行われること、③そのため、同じ水田の中でも何度となく漁撈が繰り返し可能となること、④1回あたりの漁獲量は少ないが、繰り返し行われるためシーズン全体の漁獲量は総体として多くなること、⑤稲作の各作業（水田耕作プロセス）により漁場としての特性が更新されること。さらにいえば、毎年稲作が繰り返されることにより水田用水期の水田漁撈も1年をサイクルとして繰り返し行うことが可能になっていること。

2 水田乾燥期（水田用水期外）の水田漁撈

水田用水期の漁撈が受動的で省力型の漁撈技術であったのに対して、水田乾燥期のそれは能動的で労力多投型の漁獲原理に基づくものであるということが出来る。さらに、そうした漁獲原理の違いは、利用される空間（漁場）や漁の主体者の違いとしても理解される。

ウケに象徴される水田用水期中の漁撈は、水田用水系の中でもとくに水田という個人の所有する空間を利用して行われることが多い。もちろん漁撈自体も小規模なものであるため、ほとんどの場合、漁の主体者は個人である。さらにいうと、水田で漁を行うのは多くの場合その水田の所有者自身である。

それに対して、この水田乾燥期の漁は、用水路・溜池・堀（クリーク）といった稲作社会においてはいわば公共の場（共有空間）を舞台として行われることが多い。こうした場合は、その特徴として、水田に比べると水界としての規模が大きいがあげられる。そのため、水田乾燥期の漁は何人かの、またときには村全体の、協同による大規模なものになることが多い。

具体的に、河川中流域に展開する用水灌漑稲作地（小山市網戸）および讃岐平野に発達した溜池灌漑稲作地（観音寺市池之尻）の例を見てみることにしよう。

【事例2】用水路のカイボシ——栃木県小山市網戸——〔安室 1988〕

網戸用水は、栃木県南部を流れる巴波川（渡良瀬川の1支流）に取り入れ口を持ち、その名の通り網戸の耕地を潤すために近世期（中世ともいわれる）に開削された用水路である。網戸にとって網戸用水は単なる1用水路にとどまらず、住民生活全体を支えるまさに生命線である。網戸は網戸用水に沿って上流から、藤塚・中坪・追切・折本・本宿の5部落に分かれているが、網戸用水も各部落ごとに分割管理されている。そのためカイボシ漁は部落を単位として行われる⁽⁹⁾。

網戸用水は秋の稲刈り前になると川との分岐点のところにある水門を閉ざして網戸用水に水が入らないようにする。この水門はいわば網戸用水の元栓であり、そこを締め切ることにより、網戸用

水内から水はすっかり抜けてしまう。そのとき藤塚では部落のヤク（共同労働）として、セキハズシ（落水に伴う堰板の片付けや掃除といった仕事）を行う。これには各戸から1人ずつ男がでなくてはならない決まりになっていた。

そのセキハズシが終わると、藤塚の管轄にある5ヶ所のセキ（堰）でカイボシ漁を行うことになっていた。セキには水が落ちるところに必ず大きな淵ができていますが、網戸用水の水を落とすと、それが水溜まりとして残る。その水溜まりの水を掻き出して行うのが網戸のカイボシ（掻き出し）である。このカイボシにはセキハズシ同様に各戸から男が1人ずつでることになっていた。

このカイボシではコイ・フナ・ウナギなど網戸用水に棲息する魚のほとんどが取れる。藤塚では、カイボシで取った魚を肴にして、部落の会所において、慰労会をかねてオベッカ（共同飲食）を行っていた。こうしたことが行われていたのは昭和20年ころまでである。

第2次大戦後は、セキハズシの日に会所に部落の人たちが集まり、部落総代を中心にして、5ヶ所あるセキにおける秋彼岸中のカイボシの権利の入札を行うようになった。このようにカイボシの権利が個人に入札されるようになると、オベッカも自然と行われなくなった。なお、こうしたカイボシの入札金は部落の収入となったが、それが行われたのは昭和25年ころまでである。

藤塚のほか、中坪では網戸用水に3ヶ所のセキを持っている。秋彼岸の前に中坪では部落常会を開いて、彼岸中のセキのカイボシの権利を入札していた。中坪の場合、こうした入札は昔から行われており、昭和15年ころまで続いていた。

また、追切では網戸用水に4ヶ所のセキを持っている。各戸の主人は秋彼岸の中日に部落の会所に総代を中心にして集まる。この日はとくに網戸用水の掃除や普請を行うことはなく、4ヶ所のセキにおいてみんなでカイボシを行うことになっていた。カイボシで取れた魚を自分たちで料理してはオベッカを行った。追切ではこうした秋彼岸のカイボシとオベッカは昭和45年ころまで続いていた。他部落のようにカイボシの権利を入札により個人に売ったことは今までに1度もない。

【事例3】溜池のゴミタテ——香川県観音寺市池之尻——〔安室 1990b〕

讃岐平野の一面にある池之尻には大小8つの溜池があり、それがちょうど集落を囲むように点在している。中でも仁池は表面積および貯水量が格段に大きく、池之尻にとっては住民生活を支えるもっとも重要な溜池となっていた。池之尻の溜池はすべて水田用水を確保するために作られた人工の皿池（周囲を土手で囲んだ浅い池）である。

溜池は、1年に1度、中の水をすべて抜いて池底の清掃や土手の補修を行う必要がある。それをゴミタテという。池之尻の場合、ゴミタテは稲刈り終了後、通常は秋の氏神祭の前に行われることになっていた。なお、具体的なゴミタテの日は水利委員が各池ごとに決めている。

ゴミタテに際して、仁池のように大きな池ではフダウチが行われることになっていた。フダウチとは、元来ゴミタテに伴って行われる漁の権利を入札することであるが、現在はそれが転じて入漁料を払ってそうした漁に参加することを意味している。水利組合が管理する池ではほとんどのところで行われた。それはひとつには、フダウチが水利組合の重要な収入源となり、高額にのぼる溜池の維持管理費の一部に当てられるからである。

フダウチが行われる日には池之尻だけでなく各地から人が集まってくる。主に漁の好きな農家の

人たちである。身近に溜池があるこの辺りの農家の人々にとっては、漁もごく日常的な行為であり、子供のときからの遊びのひとつでもある。そのため、いつ、どこの池でフダウチが行われるかといった情報は自然と耳に入ってくる。池之尻の人が他村の池へフダウチに行ったり、また池之尻以外の人が池之尻の池のフダウチにやってくることも、仁池のような大きな池ではよくあることである。各池ではその管轄する水利組織の都合により、ゴミタテの日時が違っている。そうしてフダウチが、今日はあすこ、明日はここ、というように適当に分散するため、好きな人は各地のフダウチを回ることができる。

フダウチするということは、その池の漁撈権を一時的に買うことを意味する。金を払ってフダ(許可証)を受ければ、その村の住人であるかないかは問われることなく、その池で魚を取ることができる。反対に、フダウチが行われない池は、ゴミタテ時の漁撈はその村の住人とくに池の水が懸かる範囲の人に限られる。フダウチのない池は、総じて面積は小さく、当然魚量も多くない。フダウチをしないため、ゴミタテの日時などの情報が、その池の水が懸かる範囲以外に知れることはない。したがって、そうした小さな溜池における漁(ゴミタテに伴うもの)はその水掛りの人たちだけで行われる。

仁池の場合、フダウチされる漁法は、投網・イタギ・ウナギカキ・サデアミの4種である。それぞれフダの値段が違う。もっとも高いものが投網であるが、それでも300～500円程度(1985～90年当時)である。

漁は漁法によって行われる順番が決まっていた。4種の漁法のうち、まず投網が一番最初に行われる。その後イタギ(魚伏籠の一種、ドウヅキともいう)が行われ、次にウナギカキとサデアミの番になる。こうした漁の順番は、排水の進捗に対応している。つまり池の中に残る水の量(水位)に応じて漁法が選択されている。まだ、水が池の中に十分にあるうちに投網をやらせる。そして、排水が進み、水が腰の高さ以下になるとイタギが行われる。そうして、イタギをやるうちに水が掻き回されて濁り、魚が弱って水面に口を出すようになるとサデアミで掬いとることができるようになる。また、イタギで十分に掻き回すと、イタギやサデアミでは取れなかったウナギが、排水が進み泥状になった水面に顔を出すので、それをウナギカマで掻き取ることができる。

また、こうした漁法の違いは、その漁を行う主体者の違いを反映する。投網は一般の農家にとってはやや専門的な漁法であり、誰にでもできるというものではない。そのため、淡水漁師および農家の中でも各地のフダウチを回るようにとくに漁好きな人が主として用いる漁法である。それに対して、イタギ以下の漁は溜池地帯ではもっとも一般的な漁法であるといってよい。かつてはどの農家にもイタギやウナギカマがあったとされる。

イタギを使って漁をするのは、その池が所在する村に住む一般農家の人たちであり、淡水漁師や他所からフダウチにやってくるような人ではない。そのためイタギ漁は村人のための漁であるとされ、村人総出の漁の様相を呈する。技術的にも単純で誰にでもでき、しかも勇壮で大変におもしろい漁であるとされる。

投網が終わると、水利委員の合図を待って、男たちはふんどしひとつになって池の中に入ってゆく。ユル(排水栓)は池の底から40センチほど上のところにあるため、ユルを抜いてもすべて水が抜けるわけではない。そんなとき行われるのがイタギである。水深が40センチほどしかないため、

大きな魚だと水面の様子や水音でおおよそ潜んでいる場所が分かる。それを目がけてイタギを被せる。イタギの中に魚が入ると、魚が当たる感触が手に伝わってくる。被せたイタギの中に魚が入ると、イタギ上部の口から手を入れて魚を掴み取る。

このイタギ漁はゴミタテにとって重要な意味を持つ。多くの人が夢中になって池の中をイタギを突いて回っていると、池の底に溜ったドロやゴミが沸き立って水がどろどろに濁る。そうしておいてから、水利委員が池の底にあるセッケツと呼ぶ栓を抜く。そうすると、ドロやゴミは水とともに押し流されてきれいに排水される。これがゴミタテの仕組みである。

こうしたイタギ漁の行われた日には、池之尻は村中がフナやコイを焼く匂いでいっぱいになる。このとき取れた魚は、量も多く、その日のうちにすべて食べてしまうことはできないため、それぞれの家でいったん焼いてから天日に干して乾燥させ保存しておいた。

こうした水田乾燥期中の漁は、事例2・3に示したように、用水路や溜池を共有する村または水利組合などの農家集団によって行われたり、または入札などによりその権利を第三者に売ることによってその村または農家集団全体の利益（具体的には金銭収入）にしたりする。漁自体は、カイボシやイタギなど能動的で労力を多大に必要とするものであることが多い。

このとき、こうした労力多投型の漁が行われる背景に注目しなくてはならない。そうした背景のひとつに、農閑期における農家の余剰労働力の存在が考えられる。多くの場合、こうした時期は、縄ないなどの藁仕事のほかは、農繁期に比べると稲作作業にかかる労力は少ない。こうした余剰な労働力があるからこそ、はじめて労力多投型の漁が可能になるといってよい。

こうして取られる魚は多量に上り、それは稲作社会を維持する上で大きな意味を持つ。ひとつには、金銭収入として水利組合など稲作社会にとって不可欠な農家集団の維持運営に使われること。

そして、もうひとつの意味としては、稲作社会における社会的・精神的な統合に大きな役割を担っていることが上げられる。それは、網戸にみられたオベッカに象徴されよう。網戸の場合、網戸用水は水利の要である。秋、水田に水が必要なくなると、網戸用水の水を落とす。そのとき、集落単位で持ち分となる用水路の掃除と堰板の片付けを行う。この作業は村仕事として1軒から1人の労働力を出さなくてはならない。そうした片付けとともに、用水路の各堰に残る水溜まりにおいて共同でカイボシ漁を行い、そこで取られた魚は作業の終了後オベッカと呼ぶ共同飲食に用いられることになっていた。後には、そのときの堰におけるカイボシの権利を入札により特定個人に売ることになっていったが、そのときの収入は当然集落全体のものとなり、やはり網戸用水の管理維持およびそれに関連する共同飲食の費用の一部となった。

こうした水田乾燥期の漁撈に用いられる漁具は、投網・魚伏籠・ウナギカマ・大型ウケ（カイボシ漁用）・手掴みといった、人による直接的な魚への働きかけを伴う漁具が主となる。水田用水期には省力型で受動的な小型陥穽漁具が主となったのに対して、水田乾燥期の場合は労力多投型で能動的な漁具ということができる。

漁法としては、同じ場所では1年に1回しか行うことができない、つまり一回性のものが多く、そのかわり1回当たりの漁獲量は水田用水期の漁に比べると格段に多い。ただし、一回性とはいっても、やはり水田用水期の漁と同様に、稲作が営まれるとともに1年をサイクルとしてその漁場と

しての特性は更新されていく。カイボシのようにいわば一時的に水界からすべての水を排除して行うような大規模でかつその水界中の魚を一網打尽にしてしまう漁であっても、次の年には水や魚はまた元通りになっていて同じように漁が可能な状態にもどっている。こうしたことも稲作活動を通して水田用水系がその外側にある自然水界と密接につながっていることを示すわけで、水田用水系は決して閉じられた系ではないことがわかる。そうしたことは定量的に確かめられたわけではないが、少なくともそこに暮らす人々にはそのように認識されてきたことは重要であり、かつそうした環境に対する認識はそこに長く暮らしてきた人々であるだけに信頼度も高いと考える。

これまで述べてきた水田乾燥期に行われる漁撈の技術的特徴を、水田用水期の漁撈と比較して示すと、以下ようになる(図4参照)。^①能動的で労力多投型の漁法が主となること、^②個人的な漁とともに、村や農家集団において共同で漁が行われること、^③大規模な漁撈が行われること、^④一回性の漁となることが多いが、その分一度に多量の漁獲がもたらされること、^⑤毎年稲作が繰り返されることにより、水田用水系の漁場としての特性は更新され、水田漁撈も1年をサイクルとして繰り返し行うことが可能なこと。

⑤……………水田漁撈の対象魚——水田魚類の存在——

1 水田魚類とは——魚にとっての水田用水系の意味——

水田漁撈により漁獲される魚介類は、ドジョウ、コイ、フナ、ナマズ、ウナギ、メダカ、タナゴ、タニシ、淡水二枚貝、淡水エビ、淡水カニなどである。こうした魚介類の特徴は、ひと言でいえば、水田用水系に高度に適応した生活様式を持つという点にある。それをひとまずここでは水田魚類⁽¹⁰⁾と呼ぶことにする。

そうした水田魚類の水田用水系への適応のあり方として注目されるのは、ひとつには、水田用水系を産卵の場としている点である。ドジョウ、フナ、ナマズ、タニシなどが、そうした魚介類の代表であろう。そのうちのいくつかは、いわゆる「寄り魚」と化して水田用水系にやってくる魚類である。フナやナマズのように産卵のために水田用水系にやってくる魚類のほかに、ドジョウやタニシのように水田用水系内で産卵し、かつ農閑期に水が排水された後も泥の中に潜ったりして水田用水系内で越冬するものもいる。

また、水田用水系と魚類とが明らかに連動して分布域を広げたと考えられる例がある[安室1984]。思川流域では、第2次大戦後に食糧難時代をむかえると、畑作地帯であった上流域に水田が拓かれたが、そうするとそれまでその地域には存在しなかったドジョウが見られるようになったという。その後、食糧難時代を過ぎると、水田はもとの畑(コンニャク畑)に戻され、水田のための用水路は放置されたまま、ドジョウも姿を消した。上流域には本来ドジョウがいなかったにもかかわらず、ドジョウウケが存在したのはそのためである。ドジョウは明らかに水田の拡大に連動して分布域を拡大したといえる。本来生態的に棲息に適していない地域にも水田ができることによってドジョウの進入を阻んでいた環境条件が解除され、結果としてドジョウの棲息が可能になったといえる。

	水田用水期の漁	水田乾燥期の漁
漁 期	4月から9月 (稲作の農繁期に対応)	10月から3月 (稲作の農閑期に対応)
漁 場	水田が主 (稲作作業により漁場性が更新)	溜池や用水路が主 (一年をサイクルに漁場性が更新)
漁 法	ウケなど陥穽漁法の多用	掻い干し漁法に代表
漁 の 特 徴 ①	受動的漁法	能動的漁法
②	省力型	労力投入型
③	ノボリ・クダリといった水田水利 のあり方を利用する漁法	落水・減水期といった気象および 土地条件を利用する漁法
④	魚介類の産卵習性などの生理生態 を利用する	農閑期労働力を利用する
⑤	一回あたりの漁獲は少ない	一回あたりの漁獲は多い
⑥	同一の場で繰り返し可能な漁	一回性の漁
漁法選択の背景 ①	稲作をめぐる用水管理が頻繁	水田用水系から水は排除される
②	農繁期で忙しい	農閑期で余剰労力がある
③	稲作作業による規制が大きい	稲作作業による規制は少ない
魚 の 処 理 ①	ケの食材に利用	ケの利用とともに、ハレの日の 供物食物にも利用
②	保存食化されることは稀	保存食化されること大
③	一部地域にスシに代表される発酵 保存	焼き干しに代表される乾燥保存
処理法選択の背景①	一度には少ないが、繰り返しもた らされる漁獲	一度に大量の漁獲
②	温暖な気象条件 (乾燥は不適、発酵保存は適)	冷涼で乾燥した気象条件 (乾燥保存に好適)

図4 水田漁撈の方法－水田用水期と水田乾燥期の対象

もうひとつ、水田用水系への適応のあり方として注目されるのは、水田魚類が水田用水系を日常生活の場とする点である。ドジョウなどは水田用水系の中で産卵し、かつそこで一生を過ごす、ウナギのように産卵場は海にありその後棲息の場を求めて水田用水系の中に入り込む魚もいる。ただし、フナやコイの場合は、棲息域や産卵場が水田用水系に限定されるものではないが、水田用水系があるからこそより多くの棲息が可能になっている場合もある。これは、そうした魚類にとって水温などの生理的条件を水田用水系は満たしているためであるといえる。

たとえば、ギンブナの場合、長野県佐久地方の水田養鯉地帯では、水田に養殖されるコイに伴って、半養殖的に水田用水系で繁殖しているものがみられる [安室 1998a・b]。この場合、ギンブナは、コイとは違って養殖対象にはなっていないにもかかわらず、コイが水田の中で養殖されるとともに、自然に殖えていったものである。佐久平のような高冷盆地では自然の水界においてギンブナの棲息数はかなり限定されるが、水田養鯉のシステムに入り込むことにより、ギンブナは多くの棲

息を可能にしていたといえる。その結果、ギンブナはターカリブナ（「田上がり鮒」・「田刈り鮒」）と呼ばれ、自然水界ではなく、あくまで水田に棲息する魚であると認識されている。

魚類にとって水田用水系の意味を問うとき、水田用水系の存在自体が内包する機能に注目する必要がある。構造改善事業や土地改良が行われる以前の水田は、たとえば先に例として掲げた思川流域の場合、下流域の水田稲作地帯においてさえ1枚がせいぜい5畝程度の面積しかなく、小さいものは1畝にも満たないものが多かった。しかも、そうした水田は、むしろ方形のものは少なく、ほとんどが不定形で、その間を縫うように用水路が走っていた。また、山間の棚田稲作地帯においては、たとえば長野県飯山市富倉では1軒の家が所有する5反程度の水田が50～80枚にも分かれていたという〔安室 1997〕。中には笑い話ではなく、自分の置いた蓑笠の下に隠れてしまうほどの水田もあったとされる。そうした不定形で小面積の水田は、全体に畦畔が大変に多くなるが、畦畔の周囲（畦際）に集まる傾向〔渡辺 1979〕のあるドジョウにとっては、耕地面積に占める畦畔の割合が高いほど、より多くの棲息が可能になったといえる。

また、河川の下流域や湖岸に広がる低湿田地帯には、アゲタなどと呼びいわゆる掘り上げ田が作られたが、そうした掘り上げ田の場合、1枚の水田の脇にはその水田を嵩上げするために土を取った跡が水溜まり（ホリなどと呼ばれる）となって残っていた。また、そうした低湿田地帯には農閑期になっても十分に排水することのできないドブツタやヒロツタなどと呼ぶ湿田が多くあった。そうした掘り上げ田に伴う水溜まりや湿田は、やはり魚介類にとっては越冬も可能な格好の棲息場所となっていた。

また、山の沢水などを用水源とする山間の水田には必ずといってよいほどにヌルメやマワシミズなどと呼ぶ温水装置が作られていた。ヌルメとは沢から入る冷水をいったん溜めて暖めるための水田（温水田）のことであるが、それは用水を田渡しでやり取りする関係にある何枚かの水田のうち一番上に作られていた。また、マワシミズはやはり冷水が直接水田に掛からないようにするため畦際に手畦を築いて水をひと回りさせてから本田へと入るようにしたものである。ヌルメやマワシミズはあくまでも稲のための温水装置ではあったが、同時に魚介類の繁殖や生理にも大きな意味を持っていた。本来その地域には水が冷たいために棲むことのできなかつたドジョウなどの魚が、その地域に進出することができた背景のひとつとして、そうした稲作のための温水装置が機能したといえる〔安室 1984〕。つまり昭和初期における基盤整備や土地改良される以前の水田地帯を見ると、そこには不定形で細分化された水田、曲がりくねった用水路、クリーク、低湿田、掘り上げ田に伴う水溜まり、温水田といったものが存在した。そうした存在は基盤整備や土地改良の理念からすれば稲の生産性のために排除されるべきもの、また稲作技術が洗練されればおのずと解消されるものであると考えられた。しかし、それは実はその地域の自然環境ことに魚類相に大きな影響を与えていた。水田用水系に適應して棲息域を拡大する水田魚類の存在が示すように、水田用水系は地域の魚類相を豊かにする上で大きな意味を持っていたといえる。

2 魚食とその意義

先に、水田漁撈の方法が大きく水田用水期と水田乾燥期（水田用水期外）とに分けられることを述べたが、漁獲される魚の処理についてもその時期区分は当てはまる。図4に示したように、漁獲

方法はもちろんのこと、魚食の位置づけや保存の必要性といった点においても、水田用水期と水田乾燥期とは対照的である[安室 1992c]。

水田用水期中に漁獲される魚は、多くの場合、2・3日中に自家消費される。とくにそうした魚がオカズトリ[安室 1987a]と称されることをみてもわかるように、日常(ケ)の食料として用いられる傾向が高い。なぜなら、水田漁撈の方法で詳述したように、この時期の漁法は、小規模であるが、同じ水田の中にあっても何度となく繰り返し行うことができたため、漁具さえ仕掛けておけば期間中には毎日のように魚を手に入れることができたからである。

そのため、取った魚を保存処理して後の為にとっておく必要はない。また、保存するほど1回当たりの漁獲量は多くない。技術的な面からいっても、水田用水期は春から初秋にかけての暖かい気候のもとにあるため、水田乾燥期にみられる焼き干し法などによる保存処理には不適である。

ただし、例外的ではあるが、産卵期を迎えて水田用水系へとやってきた魚を大量漁獲できる地域では、そうした魚をスシに代表される発酵法により保存するところもある。こうした淡水魚(とくに水田魚類)の発酵保存がなされるところは、民俗調査の報告で見ると、全国的にはかなり限定されているといつてよい。また、現存する地域では、儀礼食や祭の供物に用いられるなど、発酵保存した魚に何らかの民俗的価値づけがなされていることが多い。

そうした水田用水期中の魚食に対して、水田乾燥期中に漁獲された魚は、保存食化され、長期にわたる食料とされることがある。ひとつには、水田乾燥期の漁が、溜池や用水路の排水に伴って行われるような大規模で一網打尽とする漁法であるため、一度に大量の魚が人々にもたらされるからである。しかし、そうした魚はその水界においては、1回行くとシーズン中には再度行うことはできないものが多い。つまり、一時に大量の魚がもたらされ、しかもそう何度も行うことができない漁であるため、そのとき取った魚を保存処理し長期間の食料とする必要にせまられたといえる。農耕生活においては、不足しがちな食料とくに動物性タンパク質の平均化の工夫のひとつとして位置づけることができよう。

水田乾燥期中の保存処理の方法として一般的なのは、焼き干しである。生魚を囲炉裏で軽く火に炙ってからベンケイなどと呼ぶ藁束に刺しては軒や囲炉裏の上につるして乾燥させるものである。場合によっては、いったん魚を茹でてからそれを天日に干す場合もある。これは煮干しということになろう。これらの保存法は、ひと言でいえば、乾燥による保存であるが、囲炉裏近くに置かれる場合は薫製の意味もある。こうした乾燥保存は、いわば、水田乾燥期の秋から冬にかけての冷涼で乾燥した気象条件をうまく利用した保存法であるといえる。

こうしてベンケイなどに刺して保存された魚は、必要に応じて豆などといっしょに煮たり、また味噌汁に砕いて入れ、だし兼具として用いたりすることができた。そうして使った分はまた順にベンケイに刺しては補充していき、翌年の春ころまで場合によっては夏前まで使うことができたという。さらにいうと、焼き干しや煮干しにした小ブナやエビは救荒食料として木桶や一斗缶などに入れて屋根裏や土蔵に保管することもあった。また、タニシの場合には、長野県のように救荒食料として郷倉に保存していたという伝承が残るところもある[長野県 1991]。

もうひとつ水田乾燥期における漁獲物の特徴としては、ケ(日常)の食物として用いられるとともに、正月や秋祭といった年中行事のハレ(非日常)の場において、とくに儀礼食や供物として用

いられることにある。たとえば、長野市檀田〔安室 1989b〕のように、そうした魚を秋祭りのご馳走としているところは全国各地に多い。また、先に示した栃木県小山市網戸のように、村（または水利組織）の共同作業として、用水路の整備とともに漁が行われ、そのとき取った魚が村人の共同飲食の食物に用いられるところもある。

⑥……………水田漁撈の意義

これまで論じてきたことをひとまずまとめると、水田漁撈の民俗的・歴史的な意義として以下の5点を指摘することができる。ただし、ひと口に日本における水田漁撈の意義を論じると言っても、当然、水田を取り巻く自然環境や水利の形態および発展段階を異にする多様な稲作地が日本国内にはあるため、それらをすべて同列に扱うことはできない。たとえば、先にも示したように、稲作地それぞれの自然条件や水利段階に応じて、水田用水期の漁撈に比重を置くところと水田乾燥期の方に比重を置くところとの差ができてくるし、また、水利段階の低い低湿な水田地帯では労力投入型の能動的な漁法が多くなるのに対して、高度に水利の発達したところではノボリ・クダリに象徴される小型定置性陥穽漁具のような省力型で受動的な漁法が発達する。

そのため、ここでは日本国内を微視的に眺めたときに問題となることではなく、もう少し大きな視点から、水田漁撈が内包する潜在力といったものを日本という括りで論じることとする。

（1）自給的生計活動（動物性タンパク質獲得技術）としての重要性

水田漁撈の意味を問うとき、まず第1に上げられる点は、稲作民における自給的生計活動としての意義である。中でもとくに動物性タンパク質の獲得法としての重要性に注目しなくてはならない。水田漁撈の漁期は大きく水田用水期と水田乾燥期とに分けられるが、それぞれ漁獲原理を変えることにより、食料として魚を1年間を通して平均化することが可能になっていた。水田からもたらされる米と魚介類との組み合わせは、稲作民の食生活における栄養バランスの問題をかなりの部分解決⁽¹¹⁾することができる⁽¹¹⁾と考える。

本稿に復元した昭和初期は、生計上の意義という点でいえば、かなりの部分において商品経済が農村部にも浸透しており、単純に水田漁撈が稲作地における主たる動物性タンパク質の獲得法であったということとはできない。しかし、聞き取り調査による限り、当時の稲作農家の食生活とくにケの食物に関してはかなりの程度まで自給性が保たれていたし、また水田漁撈に関する伝承の豊富さを考えると、日本において水田漁撈は稲作地における自給的生計活動として一定の意義を有していたと考えることはむしろ自然なことだといえる。また、その重要性はおそらく商品経済の浸透と反比例するかたちで、時代を遡るほど大きなものであったと考えられる。

また、これは次に述べる金銭収入源としての重要性とも関わる問題であるが、自給的生計活動として行われてきた水田漁撈は、長野県のような内陸地において、水田養魚へと展開し、商品としてのコイ生産という性格を強く持つに至ったところまででくる〔安室 1998b〕。自家消費の範囲を越え、商品経済・貨幣経済の浸透に対応した近代における農家経営のあり方を示す1例といえよう。

（2）金銭収入源としての重要性

第2点目は、水田漁撈の持つ金銭収入源としての意義である。これは、水田漁撈の意義が個人ま

たは家の自給的生計活動から村社会（水利社会）全体のものへと拡大していったときにみられるものである。その場合、水田漁撈の場合は、個人の所有となる水田ではなく、村や水利組織で共有する溜池や用水路であることが多い。共有される溜池や用水路は水田に比べると大規模で漁獲量も多いため、より金銭収入源としての性格を帯びやすいといえる。

たとえば、先に示した栃木県小山市網戸や長野県大町市海ノ口〔安室 1992b〕では、共有する溜池や用水路を利用した漁撈には入札制が導入されており、入札金は村や水利組織の収入となっていた。また同様に、香川県観音寺市池之尻〔安室 1990b〕や神奈川県横浜市獅子ヶ谷〔安室 1995a〕では、溜池を利用して村や水利組織が主体となって養殖業を営んだり、また養魚権を町の養殖業者など第三者に売っては収入を上げたりするようになった。当然そうした収入は村や水利組織が管理する溜池や用水路の管理維持費に充てられる。そうした公共性の高い溜池や用水路では、個人または家レベルの自給的生計活動よりも、村や水利組織の利益が優先されていたといえる。

そうした村や水利組織レベルの動向に対して、個人のレベルにおいては、元来自給性の強い水田漁撈が水田養魚に展開し、さらにそれが大正から昭和にかけての養蚕不況を機に、養蚕に代わる稲作農家の現金収入源として一時期大々的に普及するところもでてくる〔安室 1998b〕。ただし、こうした個人レベルの動向は、長野県のように内陸地にあり農家経営が養蚕業にかなりの部分依存していた稲作地において顕在化したものであり、日本全体に一般化できることではない。

（3）水田漁撈が生み出す社会統合

第2点目に指摘したことは、水田漁撈が稲作社会（水利社会）の統合に果たした役割とも関連する。共有空間である溜池や用水路における漁撈や養魚の権利を売り、村や農家集団全体の利益にしようとする発想の根本には、水田漁撈が稲作社会の統合に果たした役割の歴史がある。先に示した小山市網戸の事例はそれをよく物語っている。

網戸では、用水路の漁撈に入札制が導入される以前は、各家から必ずひとりずつが出て用水路整備の村仕事を行うとともに、村人共同のカイボシ漁とその時取った魚を用いたオベッカと呼ぶ共同飲食が一連の行事として行われていた。用水路の整備やカイボシ漁には男が参加したが、女もオベッカの賄い方として出る必要があった。村の規約では各家1人ずつということになってはいても、結局のところ1軒の家から男と女がでることになるため、この行事はまさに村人総出の感があったとされる。こうした事例のほかにも、溜池における漁撈がその水を使う村人の共同で行われたところは日本各地にみられるし、そうした共同漁が村の祭りと結び付く場合もある。

この場合、水田漁撈は、水を共有する人々が、1年に1度、稲作社会（水利社会）における連帯の必要性を確認する機会として機能していたということができよう。共同の水利作業と共同漁および共同飲食が一連のものとして行われることの社会的意義がそこにある。水田漁撈は、水利関連の共同作業とともに村仕事のひとつとされるが、それは道普請のような共同労働の意味にとどまらず、共同の娯楽の側面も合わせ持つことに注目しなくてはならない。共同で行われる水田漁撈は、たとえるなら村民運動会のような役割を果たしていたといえる。

こうしたことを考えれば、水田漁撈が稲作社会における社会統合を生み出し、またそれを維持するひとつの契機になっていたといえる。とくに、水田漁撈が社会統合と結び付く傾向は、水利が高度に発達した稲作地つまり水利において高度な共同性が要求される稲作地ほど高い点は注

目しなくてはならない。先に事例2として取り上げた小山市網戸や事例3の観音寺市池之尻は、まさにそうした高度な水利社会の典型である。

(4) 水田漁撈の娯楽性

昭和初期という時代は、水田漁撈の技術的な面でいえば、まさにクライマックスを迎えた段階にあった。水田内のウケの敷設方法にみられるように、稲作をめぐる水管理のあり方に対応して、水田漁撈の技術はじつに精緻な段階に達していた。しかし、先にも示したように、その自給的生計活動としての意味は商品経済の農村部への浸透に反比例して低くなっていたと考えられる。では、そのように自給的生計活動としての意味が薄れるなか、技術的にはむしろますます高度化し、かつその後においてもこうした水田漁撈の技術が伝承されていったのはなぜか。

そのとき考えなくてはならないことが、水田漁撈を行う人々の心性に関してである。これが水田漁撈の持つ第4点目の意義である。水田漁撈が技術的にはクライマックスを迎えつつ、一方で水田漁撈が金銭収入源となり水田養魚へと結び付く方向性をたどったのとは別に、全体的には自給的生計活動としてその意義を低下させていったことは否定できない。しかし、そうした全体的傾向のなかにあっても、なおそれが伝承として豊富に残されているのは、人々は単調な農耕生活のなかにおいて、ある種の娯楽性を水田漁撈に見いだしていたからだといえるのではなかろうか。

筆者の経験でも、単調な民俗調査の最中、それまでの様子とはうって変わって、じつに生き生きと楽しそうに田圃での魚取りについて話し始める人は多い。まさにマイナー・サブシステムの持つ娯楽性であろう。⁽¹²⁾そして、水田漁撈にみる娯楽性は、個人のレベルにとどまらず、稲作社会における人と人また家と家の社会統合にも一役買っていたことは、第3点目の意義として指摘したとおりである。さらにいえば、小山市網戸や観音寺市池之尻のように、水利が高度に発達した稲作地ほどそうした水田漁撈の持つ娯楽性が稲作社会の精神的統合に利用されやすいという傾向がみられる。

(5) 稲作史に与えた影響

最後に、第5点目として、日本における稲作の展開史に与えた影響を上げることができる。これは、それまでの4点とはレベルを異にする問題であるが、筆者のもっとも主張したい点である。なお、この点については、水田二毛作や畦畔栽培といった水田畑作や水田採集も考慮して別稿〔安室1989a・1998b〕において詳述しているので、詳しくはそれを参照していただきたい。以下では、本稿の趣旨に沿って、簡単にその要旨だけを述べることにする。

本稿において時間軸とした昭和初期までの日本における稲作史についていえば、その基本は拡大展開にあったといえる。昭和初期には、水田率が90パーセントを超えるような極端に稲作に特化した地域が各地に形成された。そうしたとき、日本人をして稲作の拡大へと向かわせた原動力のひとつに、言い換えれば日本人が稲作を積極的に選んでいった要因のひとつに、水田漁撈があったと考えるものである。

水制御に代表される稲作の技術水準が上がり、その結果として稲作への特化が進んでいくと、必然的に稲作活動は時間・空間・労力のすべての面で人々の生活を規定する割合を高め、稲作労働への集中化を生み出すことになる。稲作に適した条件を備えたところでは、自然環境は稲作により改変され、ことに水界は水田用水系へと整備されていく。必然的に、稲作活動とは別に行われていた漁撈は労力的・時間的にその余裕が失われていく。つまり、生業全体に占める稲作の重要性が他生

業に比べて突出して大きくなった結果として、稲作活動に忙しくて、とても他の生業活動（自然水界での漁撈）まで手が回らなくなってしまう。

そうしたとき、稲作民が生計を維持するためにとった戦略が、稲作による他生業の内部化（稲作論理化）であるといえよう。稲作への内部化は、漁撈であれば水田漁撈や水田養魚といったかたちで行われる。つまり水田を稲作の場として選択したことが、稲作という生業に漁撈など他生業内部化の潜在力を与えたといえることができる。そうした水田の潜在力があるからこそ、日本において稲作が文化的・経済的に大きな影響力を持つほどに特化できたと考えられる。

水田漁撈に代表される稲作による他生業内部化の知恵は、商品経済・貨幣経済の進展といった歴史の大きな流れの中にあっても、比較的遅くまで日本の稲作農家が食料の自給性を維持することができた要因として指摘できる。また、そうした稲作に内部化された他生業の存在は、自給性を維持しながら稲作に特化するという、いわば矛盾した生計維持のあり方を可能ならしめた最大の要因であるといえよう。とくに水田漁撈が動物性タンパク質の確保に果たした役割は大きかったと考えられ、日本稲作が有畜形態を明確にはとらなかったのも、こうした背景があつてのことであるといえよう。少なくとも、水田漁撈が行われていた以上、一般にいわれるように近代まで稲作農家では栄養上の問題として動物性の食物が極度に不足した状態にあつたとは考えられない。

こうした食料自給の志向性が崩れ、稲作＝米作（水田＝米作地）となり、水田からの恵み（水田漁撈に代表される内部化した生業活動）を手放してしまったのは、米の生産性と稲作労働の省力化を主眼とした現代農業のあり方および農村自体の変容（たとえば商品経済・貨幣経済の浸透による食生活の変化）によるものと考えられる。水田には昭和30年代以降、大量の化学肥料や除草剤などの農薬および大型農業機械が投入されていった。その結果、水田にはもはやドジョウやタニシは棲まなくなり、また労働生産性に見合わない二毛作麦や畦豆の栽培は水田から姿を消していった。その是非は別として、その後の稲作はいわば工業論理化された稲作というべきものである。

⑦……………水田漁撈の歴史と広がり

1 水田漁撈を支える思想

ひと言でいえば、水田漁撈を生みだし伝承させてきた根本には、民^{たみ}の論理がある。水田漁撈の意義を生計活動に見るにしろ、また娯楽に見いだすにしろ、それは民の側の論理にあるものである。ここでいう民とは、自ら水田を耕し、また水田漁撈を行って生計活動とする生活者を指している。また、次に挙げる公^{おおやけ}とは、そうした民を政治的また制度的に指導する階層を指す。言い換えれば、農政を掌り、稲作日本を主導した人⁽¹³⁾および組織である。

民の論理に対して、公の論理では、水田漁撈は排除の対象となる。なぜなら、稲の生産性に視点を置くなら、水田漁撈はマイナスの活動として為政者には受けとめられていたからである。たとえば、水田用水期中において水田の中の魚を取るためにわざと畦を切って水を落とすことは全国的にごく当たり前に見られることであるが、それは公には稲に悪影響をもたらすものと受けとめられていた。それに対して、民の論理では、魚を取るために半日くらい水田の水を切っても稲は

生命力の強い草なので大丈夫だとされる。また、西表島の例〔安室 1994a〕にみられるように、重要な水田漁撈の場となるミズグモリと呼ばれる水田中の水溜まりは、公としては稲を植えることのできない空間として一刻も早く無くしてしまいたいものである。つまり、耕作者の反稲作的とされる行動と水田構造上の非効率性の両面において、公の側から水田漁撈は排除の対象となってしまう。

以下の史料はそうしたことをよく示している。水田漁撈が記録として歴史的史料に残されることは稀であるが、その残された記録はことごとく公が水田漁撈を規制するためのものである。以下、いくつかの史料をあげてみよう。

旧花岡村（長野県）に残される寛政9年（1797）の『獵業御廻状書写帳』〔小林 1960〕には、「一、請場相止候ニ付自然植田等江網打又ハ夜中田之あと等損し致当テ網候類之儀制候為ヲ以来揚魚之節ハ水つき之場所村方より番人付置役人共昼夜相廻り候右躰之義又ハ調義取致シ候者於有之ハ不依誰相改右道具取押名前承り届可申出候」と記されている。これによると、冠水した水田にやってくる魚を取るために投網を水田の中で打つことを禁じ、その禁を犯したものについては村役人が道具を押収しその名前を報告すべしとしている。また、花岡村に近い小坂村においても、明治3年（1870）の『小坂村諸獵業触書留』〔小林 1960〕を見ると、「一、上り魚之節植田江網打亦は田之あと等損し当網等いたし口儀停止之事」と記されており、やはり水田漁撈は明確に禁止されている。

また、近世における南西諸島の農業事情を示す『農務帳』〔具志頭 1731（享保16年）〕によると、「農事手入」のあり方として、「一、稲刈後魚、鰻取杯畦切損候ハ、早差当候節可耕様難成時節取失可申候間、右之仕方可差留事」とある。これは、稲刈り後にウナギを取ろうとして畦を壊してしまうと、水田が乾燥して耕作ができず農作業の適期を逸してしまう恐れのあることを戒めるものである。また、同じ南西諸島の例として、近世後期（年不詳）の『田地奉行規模帳』〔仲吉 1932〕には、「魚鰻取得方に堰切倒又は耕方之口水相下り候儀、嚴重取締可致候」とある。さらに、近代に入ってから、『農務帳』とほぼ同様の記述が『八重山島農務帳』〔富川 1874（明治7年）〕に繰り返されているし、また明治25年に喜屋武間切地頭代玉城三平が島尻役所に提出した『耕作上に関する村内法』〔仲吉 1932〕をみると、「一、田方より魚を捕る為め網を放ち作毛を害するものは、十銭以上一圓以下の科金申付、他村他間切の者は其村屋番所へ引渡、同断の科金徴収候事」とあるように、水田漁撈を厳しく戒め、それを犯したものに対する罰金の規定まで作っていることがわかる。

こうしたとき、たとえば、筆者が琵琶湖畔の低湿地帯で出会った「田に稲は植わっておりさえすればええ（収穫できてもできなくてもよい）」〔安室 1987a〕という人々の存在や、また向山雅重が記録した「稲を作るよりフチ（水口付近にできる水溜まり）のほうがよい」〔向山 1972〕という民の声は、おそらく公の耳目には入ってこないし、また見知ったところでそれは公としては戒めるべき民の所行ということになってしまう。低湿田や水田の中の水溜まりが魚の宝庫であり重要な漁場であるとする民の認識との違いは明瞭である。明らかに水田漁撈を支えてきたのは民の知恵であるといつてよからう。

先に上げたような歴史史料にみられる公の規制の存在は、逆からみれば、水田漁撈が米の収穫に影響を及ぼすほど頻繁に行われていたことの証であるとも考えられる。また、そうした規制が長野県諏訪地方や沖縄県において近世から近代にかけて繰り返さされたにもかかわらず現在に至るまで伝承されてきたことから、まさに民における水田漁撈の重要性を読み取ることができよう。

2 水田漁撈の広がりと深度

水田漁撈はかつて日本各地の稲作地で行われていた。表1に示した筆者の報告以外にも、何人かの研究者により興味深い報告がなされている。いくつか事例を上げれば、宮城平野を流れる広瀬川流域の稲作地帯ではドジョウボイと呼ぶ一種のヤナに似た方法で堀のドジョウを取っていた〔中富 1990〕。また、宮崎平野〔小野 1966〕や奈良盆地〔浦西 1981〕では灌漑用の溜池において村人総出による大規模な漁撈が毎年定期的に行われていた。このうち奈良盆地では溜池の漁撈権が村儀礼の「雨よるこび」に際して入札にかけられていた〔野本 1993〕。この他、山陽地方（岡山県）では水田に上ったナマズを鉋で叩きとるナマズキリ〔湯浅 1977〕と呼ぶ漁撈が行われていた。

さらに、こうした事例は日本に限らず、筆者の手元にある文献だけを見ても、中国〔長江水産研究所ほか 1966〕・フィリピン〔八幡 1959〕・インドネシア〔五十嵐 1984〕・カンボジア〔東 1996〕・タイ〔石毛・ラドル 1990〕・インド〔ホーネル 1978〕といったアジアの水田稲作圏の国々でもかなり一般的なことであり得ると考えられる。

とくに興味深いものにカンボジアのトンレサップ湖周辺の低湿地に住むクメール人の事例〔河岡 1976〕がある。彼らは2月から5月にかけて村落単位で湖沼地帯に移動して、その3か月間に浮き稲を栽培しながら漁撈活動を行うという。彼らにとって稲の神と魚の神は同一のものであるとされる。この事例などは、稲作民と漁撈民、水田と漁場、さらにそれに対応する神観念までが、まさに生業複合的な状態で存在していることを示すものといえよう。

また、食習俗に関連した分野でいえば、広くアジアの稲作圏において魚醤・ナレズシの研究を行っている石毛直道とケネス・ラドルによると、インド亜大陸より東の水田稲作地域には、漁業の1類型として「水田漁業」と呼びうるものが存在し、とくに東南アジア大陸部の平地においてその傾向が著しいとされる。しかも、そうした魚と米がセットになった水田漁業の中からナレズシが起源したと推定している。さらに、水田漁業の研究は食習俗にとどまらず、水田農耕の生活様式を考える上で重要な問題であることを指摘している〔石毛・ラドル 1990〕。この他、食習俗からみたときの水田漁業の重要性の指摘は、日本の輪中地帯における魚食を調査した日比野光俊においてもなされている〔日比野 1993〕。

このように見てくると、水田と漁撈との関係は決して日本にとどまらず水田稲作圏すべてにかかわる問題であることがわかる。

また、歴史的に見ても、この問題はかなり遡って考えてみる必要がある。その一例として、静岡県伊場遺跡出土のウケの発掘例〔八木 1973, 江上 1975〕を上げることができる。このウケは7世紀後半のものと推定されている。このウケの発掘場所に注目してみると、それは低湿地性集落の「大溝」とされ、稲作に関連した人為的施設と考えられる。そうすると、そのウケの付設場所は日本各地の民俗事例と同様に、水田に付属した用水堀であった可能性が高い。また、大阪府長原遺跡の古墳時代から飛鳥時代にかけての水田跡からはヤスが発掘されており、その形態および発掘状況から水田漁撈法のひとつであるヨボリ漁と関連するものである可能性が指摘されている〔根木ほか 1992〕。もし、そうであるなら、あくまで推論にすぎないが、本稿で結論として上げたことはかなり時間を遡っても当てはまるのではなかろうか。さらに言えば、日本における水田稲作の受容の時期にまで

表1 水田漁撈の方法一覧

漁具分類	漁具名(漁法)	調査地	仕掛け場所	魚	出典
釜	ドジョウウケ(同左)	長野市檀田	水田の水口	ドジョウ	(安室,1989b)
釜	オケ(同左)	長野県長野市大石	溜池の排水時	エビ	(安室,1995b)
釜	ドジョウウケ(ノボリ)	栃木県鹿沼市酒野谷	代掻前の水田	ドジョウ	(安室,1984)
釜	ドジョウウケ(ノボリ)	栃木県鹿沼市野尻	用水路の水入れ時	ドジョウ	(安室,1984)
釜	ドジョウウケ(ノボリ)	栃木県栗野町北半田	田草取り時分の水田	ドジョウ	(安室,1984)
釜	ノボリウケ(ノボリ)	栃木県栗野町細尾	用水路の堀干し時	ハヤ・ヤマメ・カジカ他	(安室,1984)
釜	ウケ(クダリ)	栃木県栗野町深程	田植直後以外の水田	フナ	(安室,1984)
釜	ドジョウウケ(クダリ)	栃木県栗野町深程	水田の落水時	フナ・ドジョウ	(安室,1984)
釜	ウケ(同左)	栃木県栗野町小金沢	田植時の水田	フナ	(安室,1984)
釜	カゴウケ(同左)	栃木県小山市生良	田草取り時の水田	ドジョウ	(安室,1984)
釜	タチウケ(同左)	栃木県小山市生良	田草取り時の水田	ドジョウ	(安室,1984)
釜	ドジョウウケ(ノボリ)	栃木県小山市網戸	水田の水入れ時・田草取時	ドジョウ	(安室,1989a)
釜	ドジョウウケ(クダリ)	栃木県小山市網戸	夕立時・稲刈前の落水時	ドジョウ	(安室,1989a)
釜	フナウケ(クダリ)	栃木県小山市網戸	水田の中干し時	フナ	(安室,1989a)
釜	ドジョウウケ(アキクダリ)	栃木県小山市網戸	稲刈後の水田	ドジョウ	(安室,1989a)
釜	カイホシウケ(カイホシ)	栃木県小山市網戸	用水路の堀干し時	コイ・ナマズ・ウナギ他	(安室,1984・89a)
釜	ドジョウウケ(クダリ)	栃木県小山市上生井	水田の中干し時	ドジョウ・フナ	(安室,1984)
釜	ドジョウウケ(アキクダリ)	栃木県小山市上生井	稲刈後の水田	ドジョウ	(安室,1984)
釜	タカッポウ(同左)	栃木県小山市下生井	冬の低湿田	ウナギ・ナマズ	(安室,1984)
釜	ドジョウウケ(クダリ)	栃木県小山市白鳥	夕立にあった水田	ドジョウ	(安室,1984)
釜	ドジョウウケ(ノボリドジョウ)	神奈川県横須賀市衣笠栄町	水田	ドジョウ	(安室,1996)
釜	ドジョウウケ(クダリドジョウ)	神奈川県横須賀市衣笠栄町	水田	ドジョウ	(安室,1996)
釜	ドジョウ(同左)	神奈川県横須賀市池田	田植後の水田	ドジョウ	(安室,1996)
釜	ウエ(同左)	滋賀県守山市木浜	水田の畦際	ドジョウ	(安室,1987a)
釜	ドジョウカゴ(同左)	香川県観音寺市池之尻	水田の水口	ドジョウ	(安室,1990b)
魚伏籠	ウゲ(アカシ)	長野県大町市海ノロ	冠水した低湿田	フナ	(安室,1992b)
魚伏籠	オウギ(同左)	滋賀県守山市木浜	冠水した低湿田	フナ・コイ他	(安室,1987a)
魚伏籠	イタギ・ドウツキ(同左)	香川県観音寺市池之尻	溜池のゴミタテ(排水)	フナ・コイ他	(安室,1990b)
網	ケイサンデ(同左)	長野県大町市海ノロ	水田の尻水口	フナ	(安室,1992b)
網	タモ(特になし)	神奈川県横須賀市大矢部	溜池の排水時	フナ・コイ他	(安室,1996)
網	ドジョウスクイ(同左)	滋賀県守山市木浜	水田のホリ(堀)	ドジョウ	(安室,1987a)
網	張り網(ワタカオイ)	滋賀県守山市木浜	冠水した低湿田	ワタカ	(安室,1987a)
網	サデアミ(同左)	香川県観音寺市池之尻	溜池のゴミタテ(排水)	コイ・フナ他	(安室,1990b)
刺突具	ヤス(ヒブリ)	栃木県小山市網戸	水田への水入れ時	フナ	(安室,1989a)
刺突具	ハリ(ドジョウタタキ)	神奈川県横須賀市池田	田植前の水田	ドジョウ・フナ	(安室,1996)
刺突具	ウナギカマ(同左)	神奈川県横須賀市大矢部	溜池の排水時	ウナギ	(安室,1996)
刺突具	ツキ(同左)	滋賀県守山市木浜	冠水した低湿田	コイ	(安室,1987a)
刺突具	ウナギカキ(ウナギカキ)	香川県観音寺市池之尻	溜池のゴミタテ(排水)	ウナギ	(安室,1990b)
手掴み	(ナワシロツブ)	新潟県上越市桑取横畑	苗代田	タニシ	(安室,1999)
手掴み	(ドジョトリ)	長野県長野市檀田	水田のヒエセギ(排水溝)	ドジョウ	(安室,1989b)
手掴み	(特になし)	長野県長野市檀田	苗代田・稲刈後の水田	タニシ	(安室,1989b)
手掴み	(特になし)	長野県長野市檀田	用水路の石垣	カニ	(安室,1989b)
手掴み	(ヨケホリ)	長野県長野市田子	水田のヨケ(排水溝)	ドジョウ	(安室,1994b)
手掴み	(ドジョウオサメ)	長野県長野市大石	水田のヨケ(排水溝)	ドジョウ	(安室,1995b)
手掴み	(特になし)	長野県長野市犬石	溜池の水路とし	コイ・フナ・エビ他	(安室,1995b)
手掴み	(特になし)	栃木県栗野町小金沢	用水路の堀干し	ドジョウ・ウナギ	(安室,1984)
手掴み	(タニシヒロイ)	栃木県小山市網戸	苗代田・田起こし前の田	タニシ	(安室,1984・89a)
手掴み	(ドジョウホリ)	栃木県小山市網戸	田起こし時の水田	ドジョウ	(安室,1989a)
手掴み	(タニシヒロイ)	栃木県小山市白鳥	稲刈後の水田	タニシ	(安室,1989a)
手掴み	(特になし)	栃木県小山市白鳥	冠水した低湿田	フナ他	(安室,1989a)
手掴み	(カイボシ)	栃木県小山市白鳥	掘り上げ田のホリ(堀)	コイ・フナ	(安室,1989a)
手掴み	(特になし)	茨城県茨城町下石崎	溜池の池普請時	フナ・ウナギ	(安室,1995a)
手掴み	(カイボシ)	神奈川県横須賀市久里浜	アゲタ(揚田)のホリ(堀)	コイ・フナ・ドジョウ他	(安室,1996)
手掴み	(カイホリ)	神奈川県横須賀市池上	水田のタマリ(水溜)	フナ・ウナギ他	(安室,1996)
手掴み	(タニシヒロイ)	滋賀県守山市木浜	稲刈後の水田	タニシ	(安室,1987a)
手掴み	(タンボツカミ)	滋賀県守山市木浜	冠水した低湿田	フナ・コイ他	(安室,1987a)
手掴み	(タニシヒロイ)	香川県観音寺市池之尻	稲刈後の水田	タニシ	(安室,1990b)
手掴み	(ドジョウホリ)	香川県観音寺市池之尻	水田の水口付近	ドジョウ	(安室,1990ba)
手掴み	(クモリカチ)	沖縄県八重山郡竹富町祖納	水田のミズクモリ(水溜)	フナ・ウナギ・エビ	(安室,1994a)
手掴み	(特になし)	沖縄県八重山郡竹富町祖納	水田	タニシ	(安室,1994a)
その他	ざる・蚕網(特になし)	長野県長野市田子	溜池の排水時	コイ・フナ・エビ他	(安室,1994b)
その他	のこぎり・なた(オーネクリ)	沖縄県八重山郡竹富町祖納	田起こし・代掻した水田	ウナギ	(安室,1994a)
その他	ざる(クモリカチ)	沖縄県八重山郡竹富町祖納	水田のミズクモリ(水溜)	エビ・メダカ	(安室,1994a)

*ここに掲げた資料は、筆者がこれまで自ら調査して入手したもの(既発表のみ)である。ただし、水田漁撈の行われた地点(集落)、漁具名、仕掛け場所、仕掛け方等が明確なものに限った。詳細はそれぞれ出典を参考にいただきたい。

遡って考察してみる必要があると筆者は考えている。

佐々木高明は、明確に弥生という時代設定をして、当時の文化を構成する要素のひとつに水田漁撈をとり上げている。さらに、それを中国大陸から伝わった技術・習俗のひとつと位置づけている[佐々木 1993]。筆者は、これまでも繰り返し指摘してきたように、水田漁撈の系譜・起源は当然水田稲作文化の起源と深い関わりを持つことは十分に民俗事例から推論することはできるし、そうした文化階段にあってはその重要な構成要素のひとつになるとも考えている。しかし、その系譜が大陸につながるものかどうかについてはまだ十分に検討する余地があるのではなかろうか。

近年になってやっと考古学的な見地から、水田漁撈が弥生時代にあってはきわめて重要な役割を果たしたという見解が出されるようになった[大沼 1992, 根木ほか 1992]。とくに大沼芳幸は網が多用される「縄文的漁法」に対して、ウケに代表される水田漁撈を「弥生的漁撈」と位置づけており注目される。ただし、そうした考古学上の研究は、筆者がかねてから行っているように、まだ民俗事例からの推測の域を出ていない。現時点では、民俗事例を無批判に弥生時代にまで遡って解釈することは許されないであろう。確たる発掘報告による検証が待たれるところである。

おわりに

本稿においては、水田漁撈の実態とその意義について論じるとき、ひとまず空間軸を日本に、また時間軸を昭和初期に設定しておいた。しかし、先にみたように、地域的広がりや歴史的深度からいっても、水田稲作文化と漁撈との関係は根源的なものがうかがわれる。

今後の課題としては、水田漁撈は、漁撈類型のひとつとして歴史的にどのくらいまで遡りうるのか、また世界的にみるとどのような地域的広がりを持つのか、さらにはそうした地域的広がりの中にあって各地の多様な環境条件下においていかなる受容のされ方をしているのか、といった点を考究していかななくてはならない。そして、その上でもう一度、水田漁撈の歴史的・民俗的意義を問い直してみなくてはなるまい。こうした問題を解決するには、民俗学的な調査研究だけでなく、今後は考古学上の成果を十分に検討しながら、同時に人類学や生態学といった関連分野を取り込んだ学際的研究が不可欠であると痛感する。

また、水田漁撈の究明は、水田稲作の歴史的展開構造を考える上で、ひとつの重要な観点になると筆者は考えている。水田漁撈を突破口にして、もう一度柳田国男が挑んだ『稲の日本史』の問題を考えてみたいと思う。

註

(1)——漁撈技術や漁場水域による分類の他にも、漁撈により生計を営む村に注目して、漁村類型というかたちで、漁撈のあり方を分類することも可能であろう。また、それは漁業資本や漁業制度による分類とも関わってくる。これらについては、いくつかの優れた先行研究が社会学や地理学および経済史学を中心になされている。いくつか例を挙げると、「純漁村」・「主漁従農村」・「半農半

漁村」・「主農従漁村」・「純農村」・「漁業市場」の農漁生産を指標とした6分類[青野 1957]は学史的につとに有名であるが、そのほかにも、漁場の利用形態および漁業権による漁村類型として、「専用漁業権の村」・「特別漁業権の村」・「定置漁業権の村」・「区画漁業権の村」という4分類[潮見 1954]がなされたり、漁民層の分解と漁撈技術および漁場の所有形態の3要素から、「小生産的漁

村」・「資本的生産的漁村」・「出稼漁村」・「内水面漁村」に4分類する考え方も提出されている〔小沼 1957〕。

しかし、ここでは漁村を対象とした類型化については深入りしないことにする。ひとつには、本稿では、漁村の概念にとらわれず、漁撈行為そのものを通して類型化を試みようとするからである。また、多くの場合、こうした分類は、海附きの村を対象にしたものであり、さらにいえば、所与の前提として漁撈により生計を営む家(村)を対象としたものとなっているからである。内水面の場合には、琵琶湖のような大水面に隣接し生計活動として特化した漁業を営む漁村のみ対象化されるにすぎない。こうしたことは本論に述べる民俗学における漁撈類型の問題にも共通する点である。

(2)——ここでは、『明治前日本漁業技術史』〔日本学士院 1959〕の分類にしたがったが、『日本水産捕採誌』〔農商務省水産局 1912〕においても、釣漁・網漁・特殊漁というほぼ同様な分類がなされている。

(3)——たとえば、『日本の漁業』〔平沢 1981〕によると、沿岸漁業・沖合漁業・遠洋漁業という分類には明確な規定はあるわけではないとしながらも、以下のような目安を挙げている。沿岸漁業は日帰りか1日どまりの範囲の海域で行われる漁業、沖合漁業は漁場が2・3日以内のところとあり出漁期間が1ヶ月以内のもの、遠洋漁業は沖合漁業に遠の漁場を利用するもの。

(4)——本稿では、漁撈と漁業とは明確に使い分けている。すなわち、漁撈とは水中に棲息する生物(魚類・貝類・藻類など)を採捕する行為自体をいい、漁業とは経済行為としての漁撈をいう。したがって、漁撈は経済性の有無は問われないのに対して、漁業は「事業あるいは産業として経営される」〔末広ほか 1962〕もので、とくに市場経済と結びついた概念である。

(5)——たとえば、その代表に『原始漁法の民俗』〔最上 1967〕がある。そうしたとき原始漁法に関する明確な定義づけはなされていない。単に海面に比べると内水面は著しく技術革新の遅れた、つまり原始的なものが残存する「古い時代の漁法」という程度の意味で用いられている。

そうした原始漁法という視点に立つと、桜田勝徳〔桜田 1959〕や竹内利美〔竹内 1983〕のように、研究者の関心はより古い時代へと向けられることになる。一例を上げれば、内水面漁撈具と狩猟具との類似性に関する問題への関心はその典型である。一見すると、本稿の主題である内水面漁撈と水田稲作との関係性に関する問題と類似しているように捉えられようが、まったく違う視点

に立っているといえる。

(6)——川漁師は、セッショウ(「殺生」に由来すると考えられる)などと他称されることをみてもわかるように、一般の農民とは区別され、またときに差別的な扱いを受けることが多い〔安室 1990a〕。川漁師の問題には、本稿とはまた別の分析視点が必要であると考ええる。

(7)——こうした点を明らかにした上で、筆者は、さらに水界への志向性や信仰および世界観といった要素を分析対象に取り込むことにより、高桑が主として海民の分析から抽出した「農民漁業」との合体を試みる必要があると考えている。

(8)——4月から9月までが水田用水期で、10月から3月までが水田乾燥期という区分は、あくまで日本における平均的な値にすぎない。南北に長い日本列島の場合、その地域差は大きいものがある。極端な例をあげると、沖縄県八重山諸島では、水田用水期と水田乾燥期の区分はそれぞれ1月から6月までと7月から12月までというように平均値からは大きく外れている。また、八重山では水田乾燥期とはいっても、在来農法では水田を乾燥させないようにしていたため、農閑期でもたえず水田には水が張られていた。したがって、正確には水田乾燥期という言い方は当たらない。こうしたことは程度の差こそあれ、日本国内の地域差として各地に認められることである。そうした地域差を生む要因は、気候条件だけでなく、その地域における在来農法のあり方ともかかわっている。

(9)——網戸の中でも折本と本宿には、網戸用水の上流側にある藤塚・中坪・追切の3部落のようなセキにおける共同のカイボシ慣行はみられなかった。それは、網戸用水の末流にある折本と本宿は網戸用水自体の水量が乏しく、支水路に分水するためのセキが設けられなかったためである。

(10)——水田魚類については、管見の及ぶ限りではエッセイ風の文章に散見される言葉であるが、明確な概念規定がなされているとは思えない。水田魚類を筆者なりに定義すると、まず第1に水田用水系を産卵場所にする魚介類であること、第2に水田用水系を一生または一生のうちのある期間を棲息の場としている魚介類であること、ということになる。この2つの条件のうちひとつでも満たすものなら水田魚類と呼ぶことにする。ただし、ここでいう水田魚類とは、生物学的な概念ではなく、あくまで人にとって有用性(食・娯楽など)のあるものという点を重要な要素として評価しているため、人に何ら利用されないものは除外して考えている。

(11)——稲作民における魚食の栄養上の意味については、フナズシを例にとり論じたことがある[安室 1992c]。さらにいえば、畦畔栽培による大豆や小豆、二毛作による大麦や小麦といったものも考慮に入れると、水田からもたらされるものは総体として非常に栄養バランスのとれたものとなる[安室 1998b]。

(12)——松井健は、マイナー・サブシステムとは、経済効果の高い日常的な生業活動とはまったく別の人間の営みの位相を身体を通して体感させる機会であるとし、そうしたマイナー・サブシステムの有する娯楽性として、それが普遍化された技術となっていない点を強調する。そのような未熟な技術だからこそ「技法」が要求され、結果としてマイナー・サブシステムのもたらす成果に個人差が生まれる。そのときそうした個人差がマイナー・サブシステムの持つ楽しみや喜びの源となることを示している[松井 1993, 1998]。

また、松井のマイナー・サブシステム論を受けて、菅豊は従来の本業と副業という生業区分ではなく、家計経済と深く関わりそれを目的化した活動と目的化しない生産活動とに分けてみると、生計維持にとってほとんど意味を持たなくなってもなお労働がマイナー・サブシステムとして伝承されてくる要因を労働に内在する遊びにもとめている[菅 1998]。

(13)——公は近世的な意味での公儀を指すものではなく、近代における地主小作制のもと実際の耕作者たる農民階層を政治的・経済的に指導し、稲作日本を作り上げていった階層をいう。具体的なイメージとしては、国・県・市町村の役人や農業指導者、および民間において稲作主導の農政を推進した人々などである。

(14)——『八重山島農務帳』[富川 1874]には「一、稲刈跡魚、鰻取杯畦切損候ハ、早差当候節、可耕様難成、時節取失候間、右之仕形堅可差留事」とある。

参考文献

- 青野寿郎 1953 『漁村水産地理学Ⅰ・Ⅱ』古今書院
 東 宏乃 1996 「田んぼと川のカンボジア、森と川のラオス」『むらとまち』7
 五十嵐忠孝 1984 「西ジャワ・プリアガン高地における水稻耕作」『農耕の技術』7
 石毛直道・ケネス・ラドル 1990 『魚醬とナレズシの研究』岩波書店
 浦西 勉 1981 「奈良県の漁業・諸職」『近畿の生業2』明玄書房
 江上波夫 1975 『日本考古学年報26』
 大島襄二(編) 1977 『魚と人と海——漁撈文化を考える——』日本放送出版協会
 大沼芳幸 1992 「弥生的漁撈の系譜 稲・人・魚」『近畿民具』16
 小野重朗 1966 「川漁点々」『西郊民俗』45
 小沼 勇 1957 『日本漁村の構造類型』東京大学出版
 河岡武春 1975 「渋沢敬三と釜と足半」『日本民俗学』99
 1976 「低湿地文化と民具(1)(2)」『民具マンスリー』9-3・4
 川喜田二郎 1980 「生態学的日本史臆説——とくに水界民の提唱——」蒲生正男ほか編『歴史的文化像』新泉社
 具志頭親方ほか 1734 『農務帳』(仲地哲夫ほか校注『日本農書全集34巻』農山漁村文化協会, 1983 所収)
 小林正人(編) 1960 『諏訪湖漁業資料』諏訪教育会
 C.O. サウアー 1952 『農耕の起源』(竹内常行ほか訳, 古今書院, 1960)
 桜田勝徳 1959 「漁業」『日本民俗学大系第5巻』平凡社
 佐々木高明 1993 「稲作文化とは何か」『農耕の技術と文化』集英社
 潮見俊隆 1954 『漁村の構造』岩波書店
 渋沢敬三 1954 『祭魚洞雑考』岡書院
 末広恭雄ほか(編) 1962 『水産ハンドブック』東洋経済新報社
 菅 豊 1998 「深い遊び」篠原徹編『民俗の技術』朝倉書店
 高桑守史 1983 『漁村民俗論の課題』未来社
 1984 「伝統的漁民の類型化にむけて」『国立歴史民俗博物館研究報告』4
 竹内利美 1983 「河川と湖沼の漁法と伝承」『日本民俗文化大系第5巻』小学館
 辻井善弥 1977 『磯漁の話』北斗書房
 中富 洋 1990 「広瀬川水域の漁撈習俗」『広瀬川流域の民俗』仙台市歴史民俗資料館
 長野県 1991 『長野県史民俗編(5巻)総説Ⅱ』長野県史刊行会

- 仲吉朝助（編） 年不詳 『琉球産業制度資料』（小野武夫編『近世地方経済史料9巻』近世地方経済資料刊行会，1932所収）
- 日本学士院（編） 1959 『明治前日本漁業技術史』（日本学士院日本科学史刊行会編，野間科学医学研究資料館発行1982新訂版）
- 根木修・湯浅卓雄・土肥直樹 1992 「水稻農耕の伝来と共に開始された淡水漁撈」『考古学研究』39-1
- 農商務省水産局（編） 1912 『日本水産捕撈誌』（アテネ書房，1979復刻）
- 野本寛一 1993 『稲作民俗文化論』雄山閣出版社
- 日比野光俊 1993 「『水田漁業』下の食形態」『人文地理』45-3
- 平沢 豊 1981 『日本の漁業』日本放送出版協会
- 富川親方 1874 『八重山島農務帳』（仲地哲夫ほか校注『日本農書全集34巻』農山漁村文化協会，1983所収）
- I. J. ホーネル 1978 「漁撈文化人類学」藪内芳彦編著『漁撈文化人類学の基本的文献資料とその補説的研究』風間書房
- 松井 健 1993 「宮古群島のタカ獲り」『琉球新報』（9月30日付）
1998 「マイナー・サブシステムの世界」篠原徹編『民俗の技術』朝倉書店
- 最上孝敬 1967 『原始漁法の民俗』岩崎美術社
- 向山雅重 1972 『続信濃民俗記』慶友社
- 八木勝行 1973 「七世紀後半の筥」『民具マンスリー』6-5・6
- 安室 知 1984 「稲作文化と漁撈（筥）」『日本民俗学』153
1987a 「水界をめぐる稲作民の生活」『信濃』39-1
1987b 「漂泊と定住の生態民俗試論」『長野県民俗の会会報』10
1988 「稲・水・魚」『信濃』40-1
1989a 「稲の力——水田における漁撈活動——」『日本民俗学』178
1989b 「漁撈から養魚へ」『長野県民俗の会会報』12
1990a 「川漁師の一年」『長野県民俗の会通信』99
1990b 「溜池をめぐる農と漁」『環境に関する民俗的認識と民俗技術的適応』（平成3年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書）
1991 「水田で行われる畑作——水田二毛作と畦畔栽培——」『信濃』43-1
1992a 「存在感なき生業研究のこれから」『日本民俗学』190
1992b 「低湿地文化・再考——水田と漁場の転換に注目して——」『長野市立博物館紀要』1
1992c 「稲作民の淡水魚食」『信濃』44-8
1994a 「西表島の水田漁撈」『農耕の技術と文化』17号
1994b 「水土をめぐる民俗技術」長野市誌編集委員会民俗部会『田子・三千寺の民俗』長野市
1995a 「『昼間日記』にみる農民漁撈」『横須賀市博物館研究報告（人文）』40
1995b 「なりわい」『犬石の民俗』長野市立博物館
1996 「三浦半島の水田漁撈」『横須賀市博物館研究報告（人文）』41
1997 「アゼ豆の村——稲作と畑作の交錯——」『横須賀市博物館研究報告（人文）』42
1998a 「水田養魚にみる自然と人為の狭間——ターカリブナの生き方に注目して——」篠原徹編『民俗の技術』朝倉書店
1998b 『水田をめぐる民俗学的研究』慶友社
- 藪内芳彦（編） 1978 『漁撈文化人類学の基本的文献資料とその補説的研究』風間書房
- 八幡一郎 1959 「魚伏籠」『民族学研究』23-1・2
- 湯浅照弘 1977 「岡山県の内水面漁撈」『日本民俗学』110
1978 「浅海漁業と干潟漁業」藪内芳彦編著『漁撈人類学の基本的文献資料とその補説的研究』風間書房
- 渡辺恵三 1979 『ドジョウ（改訂版）』農山漁村文化協会

（熊本大学文学部，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（1999年7月6日審査終了受理）

A Proposition on the Paddy Field Fishery: For the Settlement of New Fishery System

YASUMURO Satoru

The purpose of this paper is to clarify the actual condition of the Japanese paddy field fishery and to discuss its folkloric and historic significance. Then, the author advocates it as a new type of fishery.

In the discussion of the paddy field fishery, its major sphere is the water system for rice paddy field. The inland water fishery has so far been divided into two groups, the lacustrine and the river fisheries. However, the water system for the rice field has great significance as the third sphere. This system designates the man-made hydrosphere, devised, controlled and maintained for rice crop: its characteristics are, unlike the natural hydrosphere, the water conditions such as currents, quantity and temperature of water, vary greatly annually according to the activities of rice cultivation. The paddy field fishery is done with the fishing gear such as fish pots and traps, taking full advantage of the change of the water conditions as the result of the various activities of rice agriculture. The targets of this fishery are freshwater fish for example the loach (dojo), the crucian (funa) and the carp, which are highly adapted life styles to the paddy field. It can be divided into two seasons according to fishing principles; the one is the paddy field season (April to September) which needs a lot of small scale, passive techniques, and the other is the dry season (October to March) which involves relatively large scale, active fishery. The following five points can be noted as the folkloric and historic significance of the paddy field fishery: 1) the importance of the self-supporting living activities (how to gain animal protein), 2) the importance of cash income resources, 3) unification of the rice cultivating society produced by paddy field fishery, 4) recreational factor of the fishery, 5) the influence on the history of rice agriculture.

The paddy field fishery has so far been classified technologically in miscellaneous fisheries, and has been considered as unimportant fishing activities by farmers; however, the practical base of this fishery is far wider spread than the fishery by fishermen. Moreover, the paddy field fishery is an issue concerning not only with Japan but also with all the paddy field rice cultivating regions in Southeast Asia. Observing historically, too, fundamental relation is indicated between rice harvesting culture and the fishery.
